研　究　紀　要

第 7 号

1990

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　次

デポの意義 ……栗島　義明(1)
—縄文時代草創期の石器交換をめぐる遺跡連鎖—

立野式土器についての一考察 ……中島　宏(45)

東国における後期古墳……山本　禎(67)
—凝灰岩を石室構築材とした横穴式石室—

中田以前の土師器研究……大屋　道則(93)
—編年研究の原則と分類方法の変遷—

瓦塔瞥見 ……高崎　光司(209)

古代～中近世の井戸跡について(1) ……鈴木　孝之(217)
—埼玉県における形態分類を中心として—

北武蔵における古瓦の基礎的研究IV ……昼間孝志・宮　昌之(273)
木戸春夫・高崎光司
赤熊浩一

北武蔵における古瓦の基礎的研究IV

昼間孝志・宮　昌之・木戸春夫
高崎光司・赤熊浩一

第Ⅰ章　埼玉県西南部における古瓦出土遺跡の概観

今回の古瓦の資料調査は、前回の本研究Ⅲに引き続き、県西南部地域を対象に行った。取りあげた遺跡は寺院跡では大寺廃寺(毛呂山町域)、窯跡では新久窯跡、栗谷ツ窯跡、新開遺跡の３例、集落等の遺跡として13例を調査した。

西部での顕著な点は、北部・中央部に比べて集落遺跡から、瓦が出土する例が多いことである。区域割りや、資料収集の上で問題や限界はあるが、出土遺跡例の比率（寺跡：窯跡：集落遺跡等）は北部で６：３：14、中央部で６：７：10、西部では５：７：21である。特に、入間川流域、柳瀬川流域に古瓦を出土する遺跡は集中するが、旧郡名で言えば、これらの地域は広い意味で入間郡に相当する地域である。

一般的な集落から古瓦が出土する場合、多くは本来的な被覆材としての使用ではなく、カマドの壁の補強材としての在り方が一般的であることは周知のことである。その搬入ルートに関しては使用状況が二義的であるために、瓦窯から直接運ばれたものか、あるいは寺院で消費されたものの再利用であるかを断ずることは難しいが、当地域での出土状況や、古代寺院の分布等から考えられることは、須恵器等とともに、直接瓦窯から消費地に運ばれたと見る方が妥当であろう。

その供給先として主体的であるのは東金子窯跡群の諸窯であることは言うまでもない。前内出、八津池、八坂前、谷久保、そして新久窯跡等からなる本窯跡群は、北武蔵の三大窯跡群の一つであり、新久・八坂前両窯跡は国分寺再建塔の瓦を生産していたことは既に知られている。入間川流域の遺跡、柳瀬川上流域の遺跡は当窯跡群との関連が濃密である。若葉台遺跡等から出土する粘土紐一枚造りの平瓦などは、まさにこの範囲での需要関係を物語るものであろう。

ここで、武蔵国分寺と瓦窯跡群との関連を注視してみると、その創建時においては、新沼窯跡を擁する南北企窯跡群が深く関わってきており、東金子窯跡群に先行する。この南北企から東金子へという瓦窯生産の移動の理由を、単純に政治的な背景だけに求めることは認められないが、少なくとも入間郡を中心とする地域で、９世紀中葉前後という時点に瓦生産が活発であった事は否めない事実であるし、それを可能にさせた社会的発展の地盤が存在したことは確かであろう。だが９世紀後半代ともなると、新たな在地の寺院の造営は顕著でなくなり、必ずしも多量の瓦を必要としない状況であったろうことは想像に難くない。

一般集落からの古瓦の出土は、そのような状況下で、過剰生産気味であった製品が流れてきたものと考えることもできるのではないだろうか。さらに言えば、新設の郡である新座郡内に比定される、新開窯跡、栗谷ツ窯跡等の小規模な窯は集落近くに営まれている。より一層、窯と集落との関連が密になってきた表れと言うことができよう。　（高崎光司）

第2章　遺跡と出土遺物

第1節　寺　　院

大寺廃寺

立地と環境

大寺廃寺は、入間郡日高町大字山根字下大寺を中心に、一部、入間郡毛呂山町大字葛貫字袋ヶ沢にかけて所在する県選定重要遺跡である。

遺跡は、毛呂山丘陵南部、南面する緩やかな斜面、標高90～100mに立地する。南側には高麗川の支流である宿谷川が蛇行しながら東流し、開折によって地形は変化に富み、狭小な水田地帯が見られるところである。

現在、日高町及び毛呂山町両域において、建物跡4棟等の遺構が検出されている（中平他1982・1984ほか、村木他　1985)。

建物跡は、約60mの間隔で、平行四辺形状の位置関係をもって配置されており、それぞれ礎石や方形配列状の石列等が確認された。日高町で検出された3棟については、報文で塔・金堂・講堂の可能性が指摘されている。

遺構の位置関係や地形、遺物の分布状況等からみて、寺域は東西約270m、南北約250mほどの範囲で検討されるべきであろう。

創建年代については、8世紀第2四半期とする考えがある（藤原　1982)。

出土遺物（第2～3図)

軒丸瓦

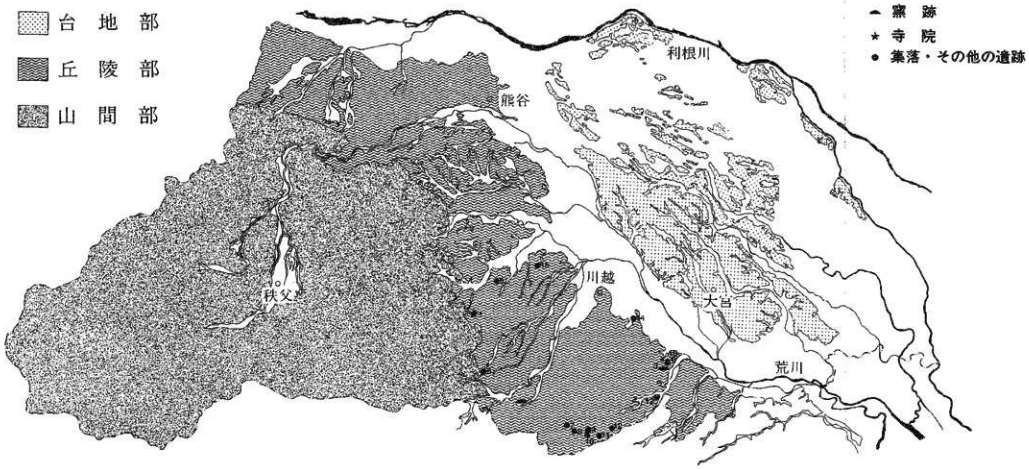
1、2は単弁4葉蓮華文である。研究紀要第6号での第2類にあたる。ともに小破片のため、全体は不明であるが、高岡技法による作りである。1に比べて2の方が外区上半部の張り出しが長い。瓦当と丸瓦部との接合部には粘土を補充し、ていねいな指ナデが施されている。丸瓦部の凸面は縄叩きの後、横ヘラケズリが施されるが、十分でない。胎土は微小礫を若干含む。色調は1が灰色、2が暗黄灰色である。焼成はともに、やや甘い。

丸瓦

3～6は平行叩きを凸面に有する丸瓦である。いずれも玉縁付きと思われる。凸面の平行叩き痕はナデ消されるが完全ではない。4の叩きの大きさは3条の幅が1.4cmである。凹面はいずれも布目痕が明瞭に残り、3cm四方当たりでは、3が30×26本、4が22×22本、5が21×18本、6が22×23本である。3と4は糸切りの痕跡が残る。玉縁は、凸面側ではシャープに削られているが、凹面側ではややシャープさに欠け、丸瓦部との境界は明瞭でない。胎土は小砂礫を若干含み、針状物質は含まれない。色調は灰色～黄灰色を呈し、焼成は3がやや硬質であるが、いずれも甘い。3、4、6の側面は分割痕が未調整のまま残る。

平瓦

7、8はいずれも凸面縄叩きの平瓦であるが、7の方が縄目が荒い。3cm単位の縄の本数は、7

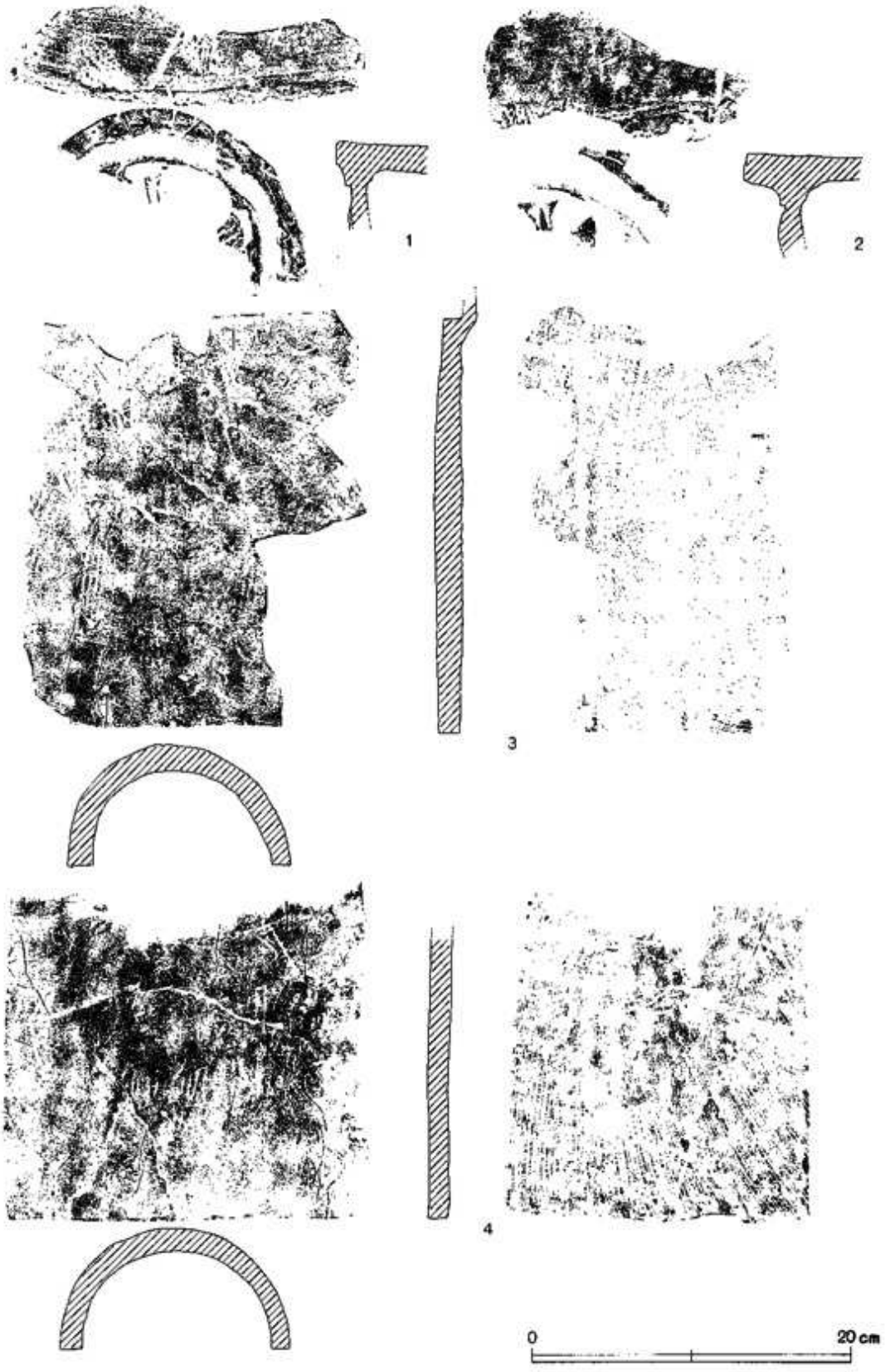


寺院
1 大寺廃寺

窯跡
2 新久窯跡
3 新開窯跡

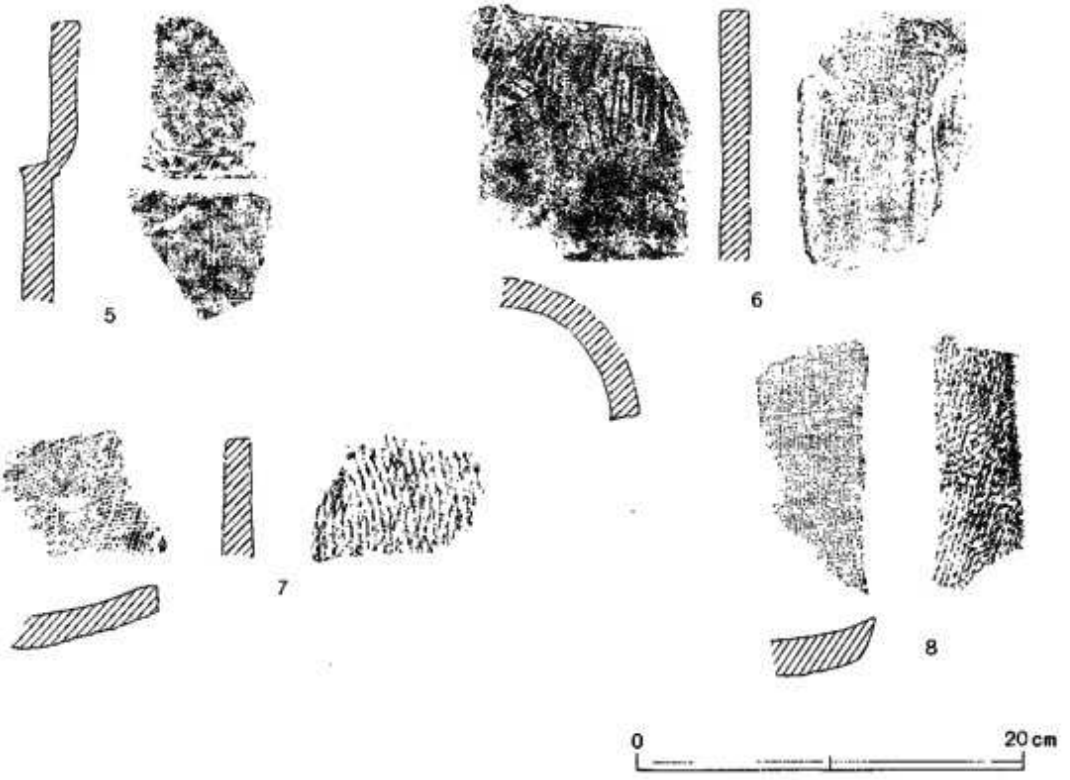
集落・その他の遺跡
4 栗谷ツ遺跡
5 まま上遺跡
6 旭原遺跡
7 砂川遺跡
8 西内手遺跡
9 美園上遺跡
10 山口城遺跡
11 巷の前遺跡
12 東の上遺跡
13 本村遺跡
14 川崎遺跡
15 若葉台遺跡
16 東台遺跡

第1図　遺跡分布図



第2図　大寺廃寺（1）

が5×9本、8が5×10本である。7の凹面の布目は3cm単位で16×16本、ややひきつれている。側面に工具先端による沈線がある。8の布目は3cm単位で18×17本。側面はケズリでなくナデ調整。胎土はいずれも微小礫を若干含み、色調も灰色～暗灰色である。焼成は8の方が良好である。8は側面の断面形態から、一枚造りによるものと推定される。



第3図　大寺廃寺（2）

第2節　窯

新久窯跡

立地と環境

新久窯跡は入間市大字新久字清水に所在し、東金子窯跡群に属する。東金子窯跡群は主に加治丘陵南側に分布し、新久窯跡はその中心となるものである。窯跡の標高は150mを前後する。窯跡の調査は昭和44年に行なわれた。その結果、A地点では瓦窯跡2基、B地点では工房跡、C地点では須恵器窯跡1基、D地点では須恵器窯跡3基、E地点では瓦窯跡と竪穴状遺構が検出されている。

出土遺物（第4図～第8図）

軒丸瓦

第1類

2・5は素弁6葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当面の直径は19.6cm、内区径15.6cm。中房は凸線で表現される。内側は円形に近いが外側はやや六角形に見える。直径は4.7cmである。蓮子は1個であ

る。蓮弁は幅広で量感がある。また弁の基部は中房を表す凸線とほぼ同じ高さで接する。界線は幅約3㎜、高さ約3㎜の凸線で表現される。周縁は幅1.6cm、高さ1cmの直立縁である。瓦当側面は横方向にヘラケズリされる。瓦当裏面は中央部が横方向のナデ、周辺部は縁にそってナデられる。胎土は微少粒を若干含む。焼成は良好。色調は灰色である。

第2類

1は単弁7葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当面は直径19.8cm、内区径14.3cm、瓦当部厚は中央部で1.8cmである。中房は上幅約2㎜、高さ3㎜の凸線で表現される。直径は4cmである。蓮子は1＋4である。界線は上幅約3㎜、高さ約3㎜の凸線で表される。周縁は直立縁で幅1.8cm、高さは瓦当上部で7㎜、下部で1.6㎜である。瓦当側面は横方向にヘラケズリされる。瓦当裏面は、下から上にナデられ、周辺部は縁にそってナデられる。丸瓦剝離部分には布目痕が認められる。胎土は微少礫、砂粒を含み、焼成は軟質、色調は灰色である。

第3類

3は単弁6葉蓮華文軒丸瓦である。第1類との相違点は、素弁と単弁および蓮子の形の違いにある。瓦当面の直径は19cm、内区径13.9cmである。中房は凸線で表現され直径は4.8cmである。蓮子は菱形でやや大きめのものが1個である。蓮弁は第1類と同じように幅広で基部は中房に接する。界線はやや幅広の凸線である。周縁は幅約1cm、高さ7㎜の直立縁である。瓦当裏面は上半部は主に周縁にそったナデ、下半は不定方向のナデが施される。丸瓦凸面は、瓦当接合部に当たるところは横方向のヘラケズリ、他は不定方向の削り或いはナデが施される。凹面は瓦当接合部がナデられるが他は布目痕が残る。布目は3cmあたり16×17本である。丸瓦の成形は粘土紐と思われる。胎土は砂粒を含む。焼成は良好。色調は灰色である。

第4類

4は単弁6葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当面の直径は18.5cm、内区径13.9cm。中房の直径は4.9cmである。第1～3類と同じように凸線による表現であるが幅が4㎜と幅広である。蓮子は1＋4である。蓮弁は直線的で角張っている。周縁は上幅1.5cm、高さ1.5cmの直立縁である。瓦当側面はヘラケズリされる。裏面はナデられている。丸瓦凸面は縦方向のヘラケズリが施され凹面は横方向のナデによって布目が消されている。胎土は砂粒、石英、長石を含む。焼成は良好。色調は灰色である。

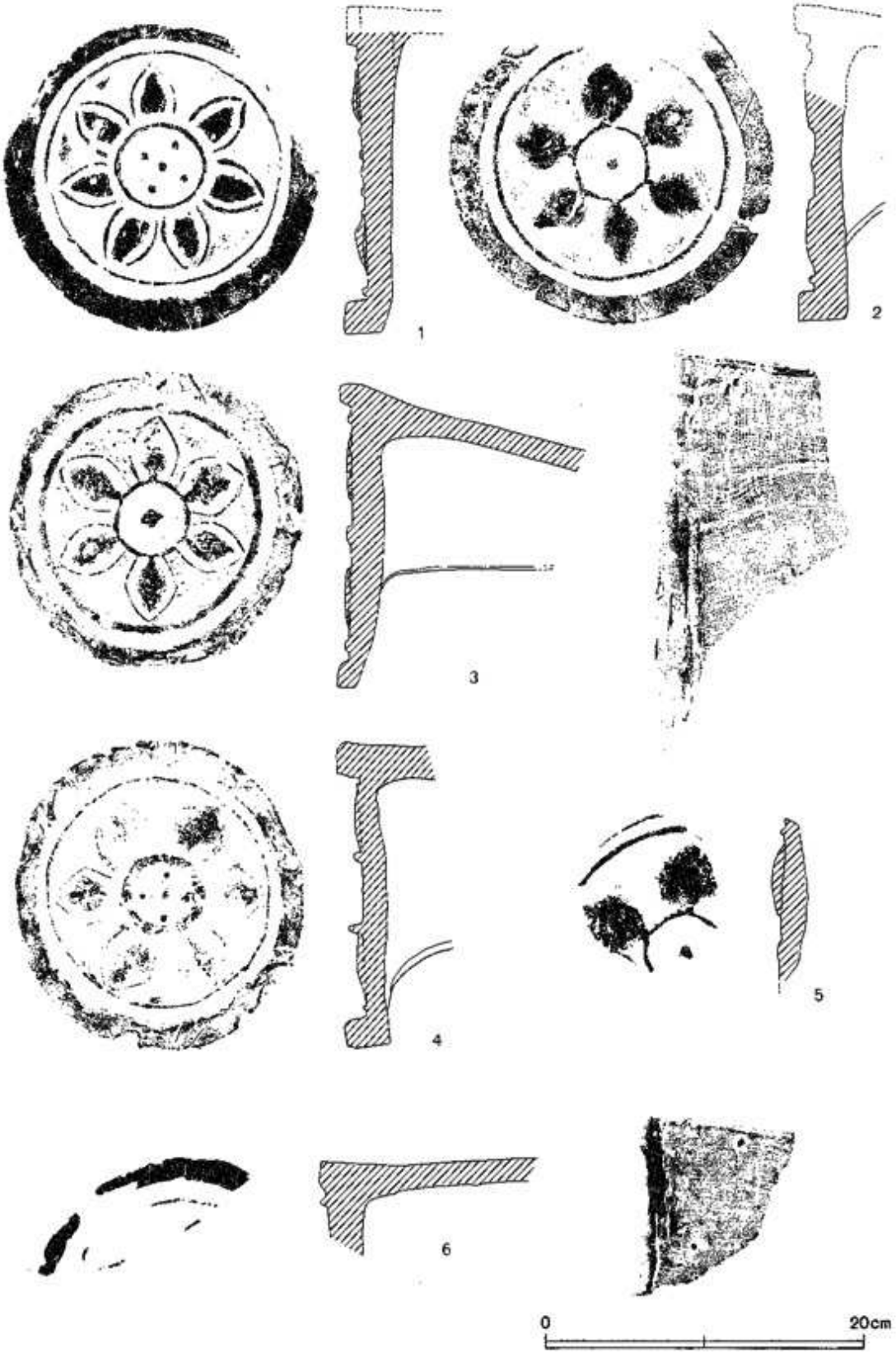
第5類

6は単弁4葉の蓮華文と思われる。大半が欠失しているため詳細は不明であるが、界線は断面が三角形を呈しており明らかに他のものと異なっている。丸瓦部分は凸面がヘラケズリ、凹面は布目痕が残っている。布目は3cmあたり26×22本である。胎土は砂粒を含む。焼成は酸化焔による。色調は橙褐色である。

軒平瓦

第1類

7は飜波状文をもつ均整唐草文軒平瓦である。瓦当右側および下辺の一部を欠失している。蓮華状の中心飾りから、波状の唐草が左右に展開する。顎は曲線顎である。平瓦凹面は3cmあたり26×26本の布目痕があり、さらにヘラ状工具による沈線が認められる。凸面は顎の部分がヘラケズリされ



第4図　新久窯跡（1）

るが他は縄叩きが認められる。側面はヘラケズリされる。胎土は砂粒、長石、石英を含む。焼成は良好。色調は黒褐色を呈する。

第2類

8は均等唐草文軒平瓦である。左半分および上辺を欠失する。子葉は中心飾りから3回反転する。上下外区には珠文が配される。顎は曲線顎である。平瓦凹面は殆ど剝落しているがわずかに布目痕が残る。凸面は縄叩きが施される。縄叩きは顎部にも行なわれわずかに先端は横方向にヘラケズリされる。側面はヘラケズリされる。胎土は砂粒、長石、石英を含む。焼成は酸化焔による。色調は褐色である。

第3類

9は均整飜波文軒平瓦である。中心飾りから左右に展開する飜波文は流れにやや異なる部分が見られるが全体としては対称を意識したものであろう。上下外区には幅広の凸線が表現される。顎は段顎である。平瓦凹面は布目痕が残る。3cmあたり31×30本の細かい布目である。凸面はこれも比較的細かい縄叩き痕が残る。縄叩きは顎部を含めて全面に施される。胎土は砂粒、長石、石英を含む。焼成は良好。色調は黒灰色を呈する。

第4類

11は第3類を小型にしたものであるが瓦当文様も多少異なる。第3類に見られた上下外区の凸線は省略されている。顎は段顎で平瓦両面の調整は基本的に第3類と同じであるが凹面では布目が3cmあたり15×19本、凸面の縄叩きが3cmあたり6本（第3類では8本）と粗くなっている。胎土は砂粒、黒色粒、白色粒を含む。焼成は良好。色調は褐灰色である。

第5類

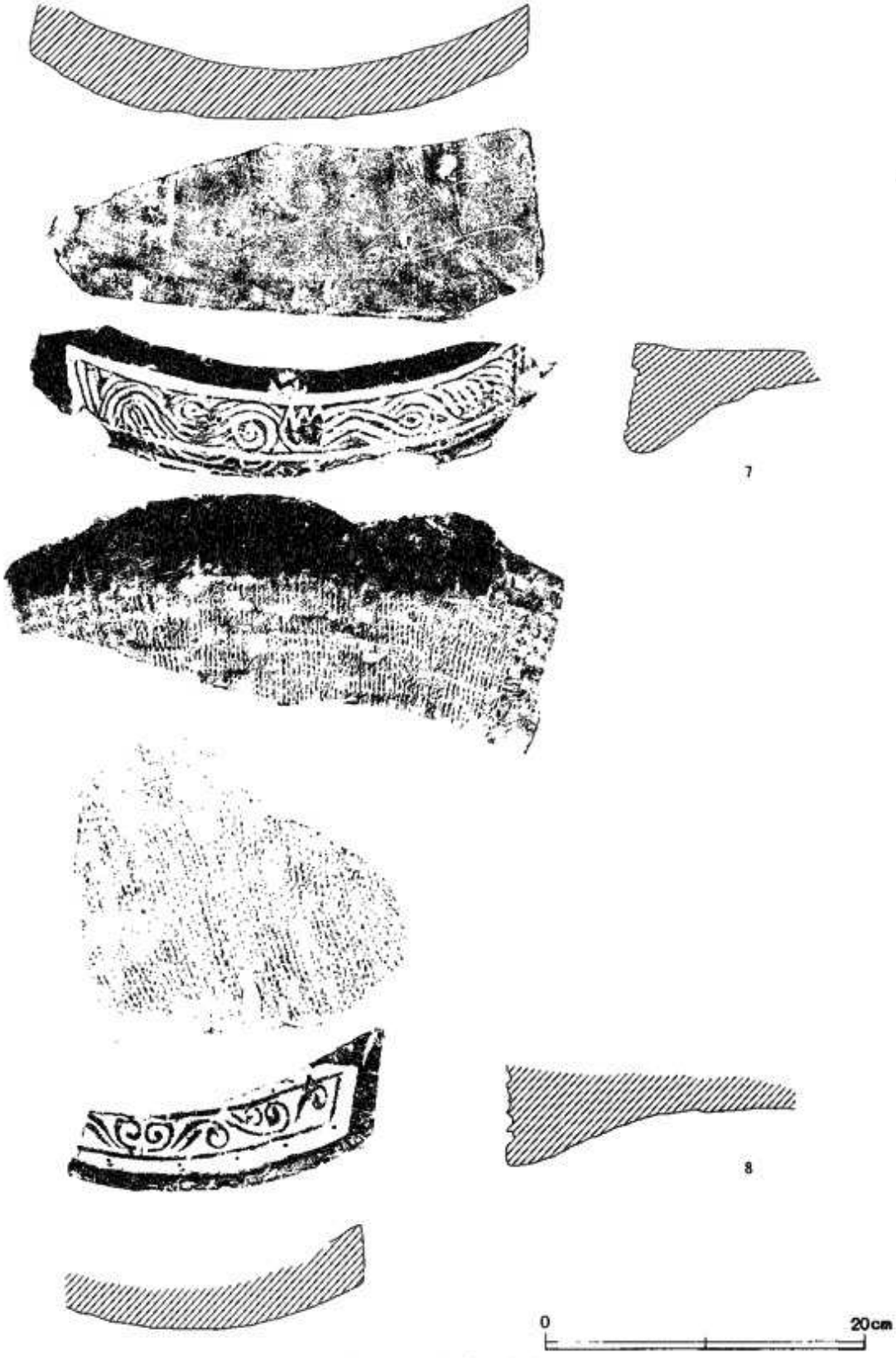
10はヘラ描の唐草文軒平瓦である。左半分を欠失する。顎は段顎である。平瓦凹面は3cmあたり16×15本の粗い布目で一部に棒状工具によるナデが認められる。凸面は縄叩きが施される。縄目は3cmあたり5本と粗い。なお縄叩きは顎部にも施されている。側面はヘラケズリされる。胎土はやや粗く砂粒、細礫を含む。焼成は良好。色調は青灰色である。

丸瓦

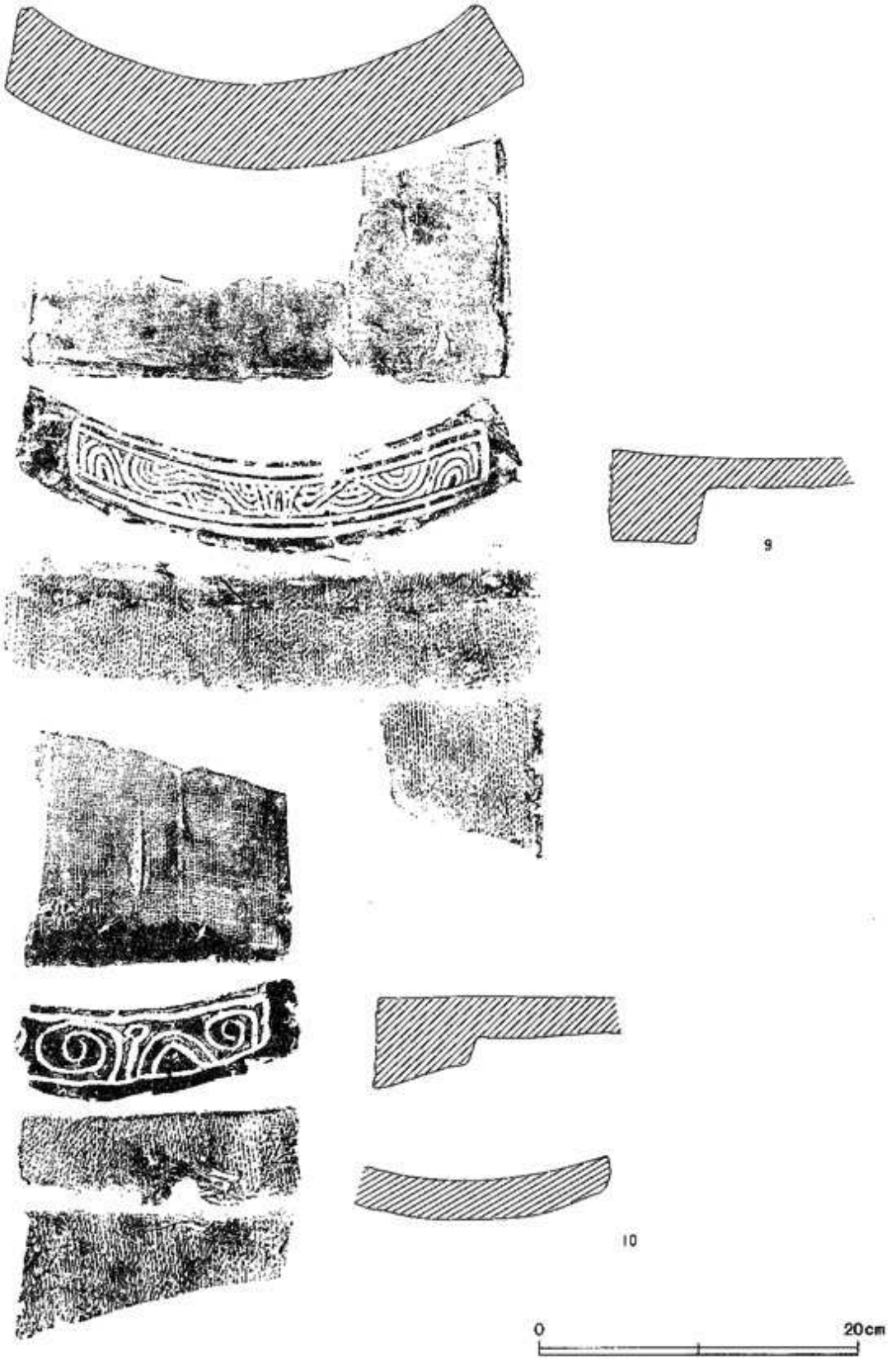
12は長さ35.5cm、厚さ約2cm、広端部幅12.8cm、狭端部幅9.5cmである。凸面は縄叩きの後ナデおよびヘラケズリによって縄目を消している。凹面は布目で3cmあたり22×21本である。端面および側面はヘラケズリされている。胎土は石英、長石を含む。焼成は良好。色調は灰色である。13は長さ約38cm、厚さ約1.5cm、広端部幅17.8cm、狭端部幅10.7cmである。凸面は縄叩き後横方向のナデを施す。凹面は布目痕が残る。布目は3cmあたり17×18cmである。端面および側面はヘラケズリされる。胎土は白色粒を含む。焼成は良好。色調は暗灰色である。

平瓦

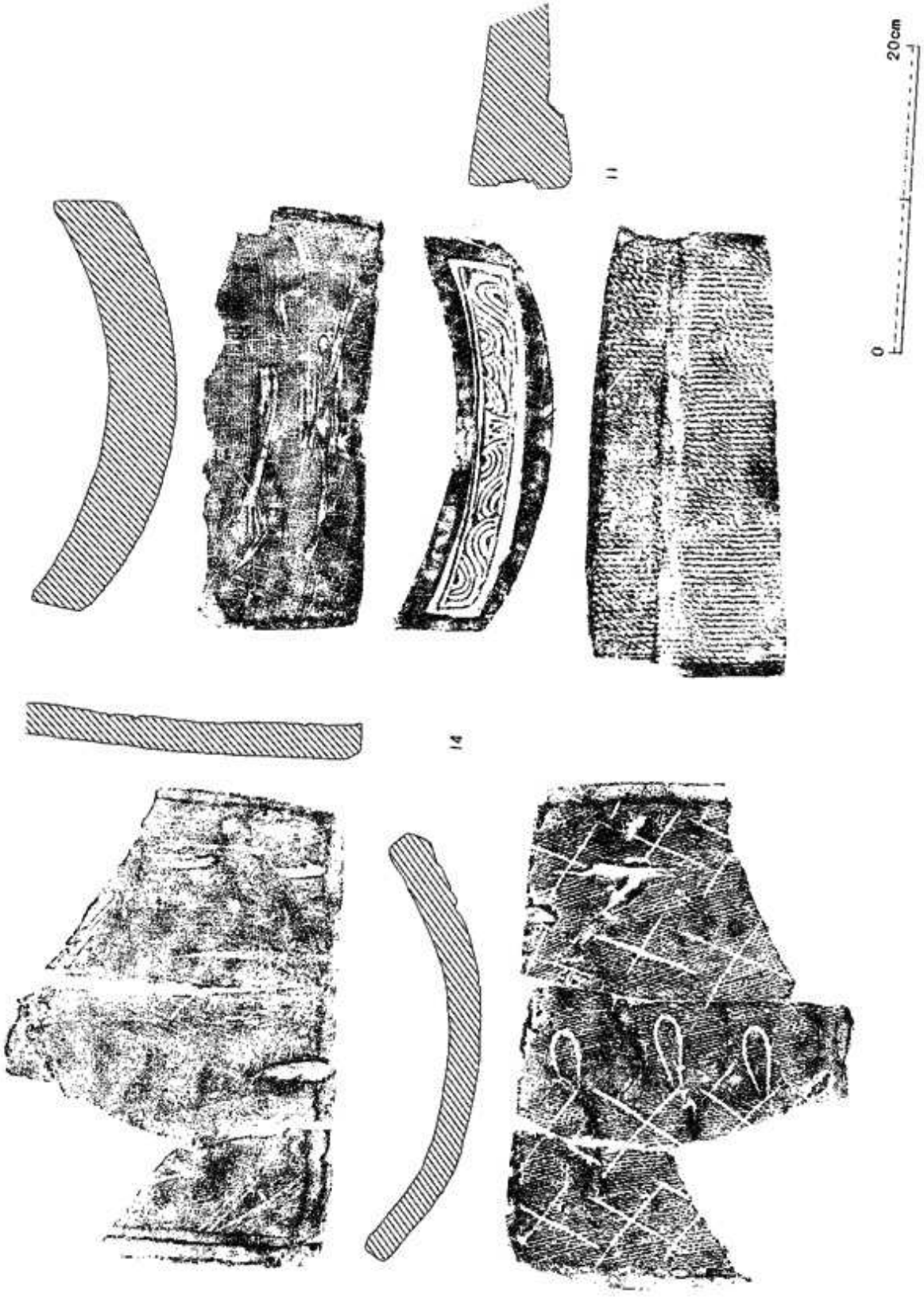
14は厚さ約2cm、凹面には縄叩きの後×印とループ状の縄の圧痕が残る。凹面は布目痕が残る。布目は3cmあたり21×21本である。側面および端面はヘラケズリである。胎土は石英および長石を含む。焼成は不良。色調は褐色を呈する。15は長さ34.4cm、厚さ約1.5cm、広端部幅27.8cm、狭端部幅23.3cmである。凹面は縄叩きされている。縄の単位は3cmあたり8本である。凹面は布目痕が残



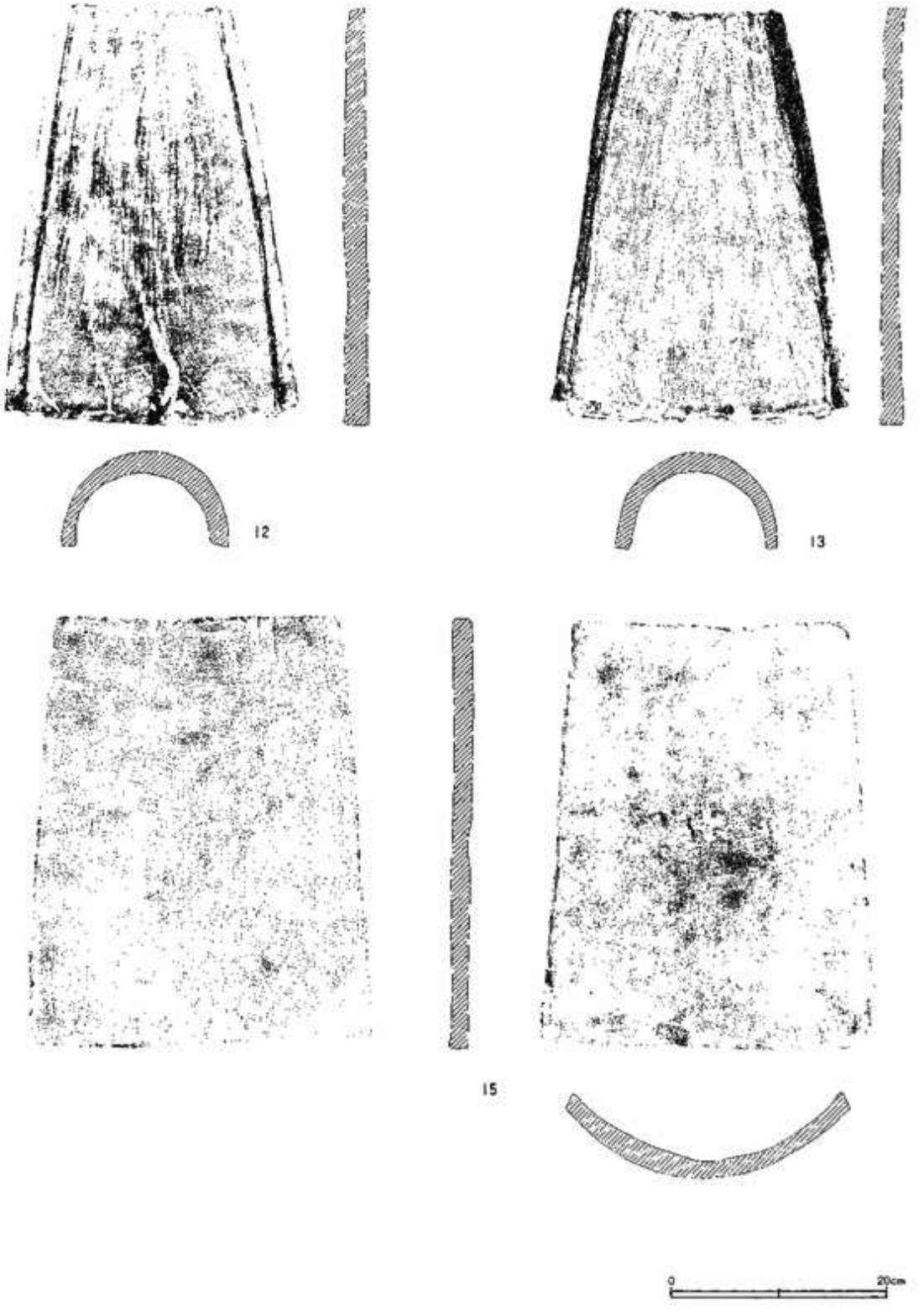
第5図　新久窯跡（2）



第6図　新久窯跡（3）



第7図　新久窯跡（4）



第8図　新久窯跡（5）

る。布目は3cmあたり33×34本と細かい。中央部に十印の窪みがみられる。端面および側面はヘラケズリされる。胎土は砂粒、白色粒を含む。焼成は良好。色調は灰褐色である。

年代

瓦は武蔵国分寺の塔再建に供給されたことが知られており9世紀前半に比定される。

新開窯跡

立地と環境

新開窯跡は、入間郡三芳町大字藤久保・竹間沢字新開に所在し、発掘調査は、三芳町教育委員会が昭和51年から開始し昭和57年まで約25000㎡にわたり実施した。検出された遺構は旧石器・縄文・平安時代である。

遺跡は、武蔵野台地を開析する柳瀬川の左岸に位置する。標高は約23mを測る。周辺には、本村北遺跡や須恵器生産に関連する捨て場遺構と工房跡を検出した俣埜遺跡、工房跡と考えられる住居跡を検出した富士見市の北別所遺跡があり、さらに、この遺跡の南方500m程の位置で、柳瀬川の谷頭部分の傾斜面に栗谷津窯跡がある。いずれも新開窯跡と近似する平安時代の遺跡として捉えられる。

新開窯跡で検出された平安時代の遺構は、遺跡の中央部に舌状に突出した台地の両側にほぼ北西方向に緩やかに傾斜する斜面と、その台地上に広がっている。登窯3基、土器焼成土壙1基、工房跡3基、ピット群、包含層などが検出されている。

登窯は北西側斜面に3基構築されている。いずれの窯も小規模で窯床傾斜が緩やかで地山のロームを掘り込み、床・壁に粘土を貼った半地下式無段無階登窯である。窯からは、補強材としての須恵器坏・瓦は出土したが窯焼成品としては検出されていない。いずれの灰原からも須恵器坏が多く全体の9割を占め、瓦、須恵器甕と続く。1号窯（Pb22区L.N.12）は遺跡の最東端に位置し、窯体の全長約4.15m、焚き口部付近には、作業場的空間と推定されるピット群と1号工房跡が伴っている。2号窯（Me03区L.N.01）は、1号窯の南西方向約250mに、3号窯はさらに50m先に位置している。2・3号窯の東側台地上には、2号工房跡・3号工房跡が存在する。この二つの工房跡は約50m離れているが、この中間には須恵器坏片・瓦片などが多量に出土する遺物包含層を検出した。包含層下には約40か所のピットを検出した。

土器焼成土壙4号窯は、3号窯の西方向約10mの斜面に位置し、調査の結果3号窯より新しい遺構であることがわかった。平面形はほぼ円形で壁・床は激しく焼土化しており、覆土最下層から土器片が多く出土した。出土土器はいずれもロクロ調整による酸化焰焼成の坏片である。

工房跡は、3基とも竪穴式である。1号工房（Pb区L.N.08）は、カマド、2本の柱穴のほかに西壁コーナーに粘土の堆積する粘土溜り遺構と竪穴中央にロクロピット2本が検出されている。2号工房跡（Gc区L.N.01）も同様の遺構である。

本遺跡は、窯跡と工房跡とからなる生産遺跡で土器はもとより瓦生産のあり方を理解する上で貴重である。

出土遺物（第９～11図）

丸瓦

１～５は、いずれも縄叩きの後に横ナデを施して叩きをスリ消している。１は、厚さ1.1～1.6cmを測る。凸面には丁寧な横および不定方向のナデが施されている。凹面には３cm単位当たり縦17本×横20本の布目痕をもち、綴じ紐の痕跡が中央を斜めに走る。狭端部はワラ状の圧痕が見られ未調整である。側面はヘラケズリを施している。胎土は、砂礫粒多く４cm大の粒子も含み粗雑である。焼成良好。色調は黒灰色を呈する。２は、厚さ0.8～2.2cmを測る。凸面には丁寧な横方向のナデが施され一部縄叩きが残存している。凹面には３cm単位当たり縦21本×横21本の布目痕をもち、綴じ紐の痕跡が観察できる。また、粘土紐の痕跡も観察できる。狭端部は棒状、ワラ状の圧痕が見られ未調整である。広端部および側面はヘラケズリを施している。胎土は、砂礫粒、小石を多く含み粗雑である。焼成良好。色調は黒灰色を呈する。３は、厚さ0.9～2.1cmを測る。凸面には丁寧な横方向のヘラケズリが施され一部３cm単位当たり８本の縄叩きが残存している。凸面の広端寄りの部分を1.3cm程の幅で横方向にケズリを加えている。凹面には３cm単位当たり縦23本×横21本の布目痕をもち、筒型の突起と見られる窪が左側面寄りに縦に走る。布の綴じ合わせ目ではない。また、凹面の広端寄りの部分を0.9cm程の幅で未調整部分をもつ。広・狭端部および側面はヘラケズリを施している。胎土は、砂礫粒、小石を多く含み粗雑である。焼成良好。色調は淡褐色を呈する。４は、厚さ1.4cmを測る。凸面は横方向のヘラケズリが施され、凹面には３cm単位当たり縦23本×横23本の布目痕をもち、横位に走る粘土紐の痕跡を観察する。また、「T」型の模骨状突起が見られる。端部はワラ状の圧痕が見られ未調整であることから丸瓦製作の痕跡と捉えるならば狭端面の可能性が考えられる。胎土は、白色粒子を混在し緻密。焼成良好。色調は灰色を呈する。５は、厚さ1.6cmを測る。凸面は横方向のヘラケズリが施され、凹面には３cm単位当たり縦21本×横18本の布目痕をもち、縦の模骨状突起が見られる。端部はワラ状の圧痕が見られ未調整である。胎土は、白色粒子を混在し緻密。焼成良好。色調は灰色を呈する。

平瓦

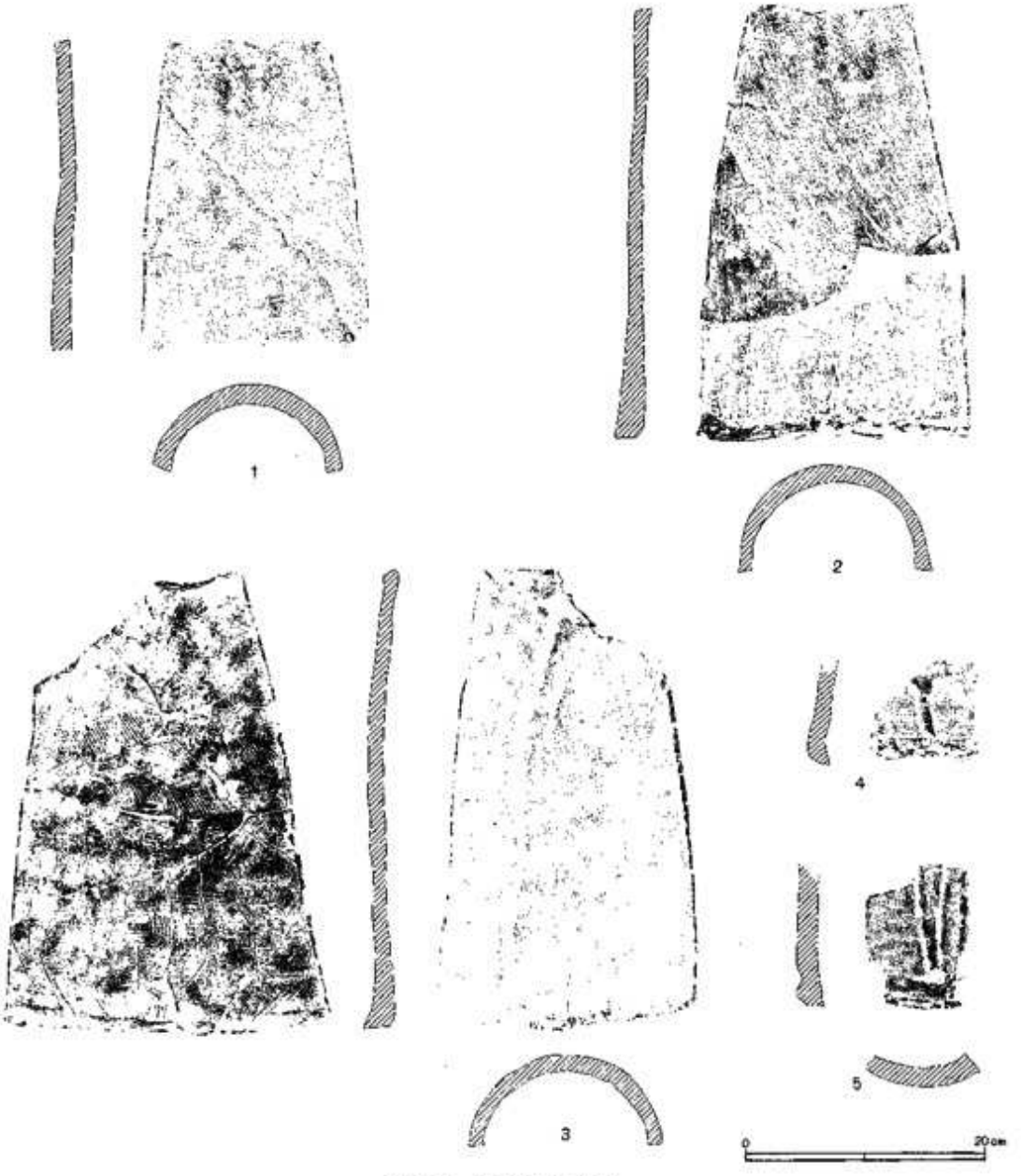
第１類

６・７・８はいずれも凸面縄叩きを施している。６は、厚さ1.8～2.6cmを測る。凹面には３cm単位当たり縦18本×横18本の布目痕をもち、広端寄り中央やや左と狭端寄り中央に模骨状の突起が縦方向に見られる。広・狭端部および側面はヘラケズリを施し、広端部には乾燥の際の棒状圧痕が観察できる。凸面には３cm単位当たり６本の縄叩きを施す。一枚造りである。胎土は、砂粒子、雲母片、石英を含む。焼成良好。色調は淡灰褐色を呈する。７は、厚さ1.8～2.3cmを測る。凹面には３cm単位当たり縦20本×横19本の布目痕をもつ。中央部分には３条の粘土紐の痕跡が観察できる。広・狭端部および側面はヘラケズリを施している。凸面に３cm単位当たり５本の縄叩きを全面を狭端方向に施し、広端寄り幅５cm程を縄叩きの後にヘラケズリを加えている。粘土板の一枚造りである。胎土は、石英、砂粒子を含みきめ細かい。焼成良好。色調は灰褐色を呈する。８は、厚さ1.2～1.6cmを測る。凹面には３cm単位当たり縦24本×横21本の布目痕をもち、狭端寄りには「大」と記した模骨文字をもつ。また、文字の右上位に狭端から伸びる一条の模骨状突起が観察できる。狭端部お

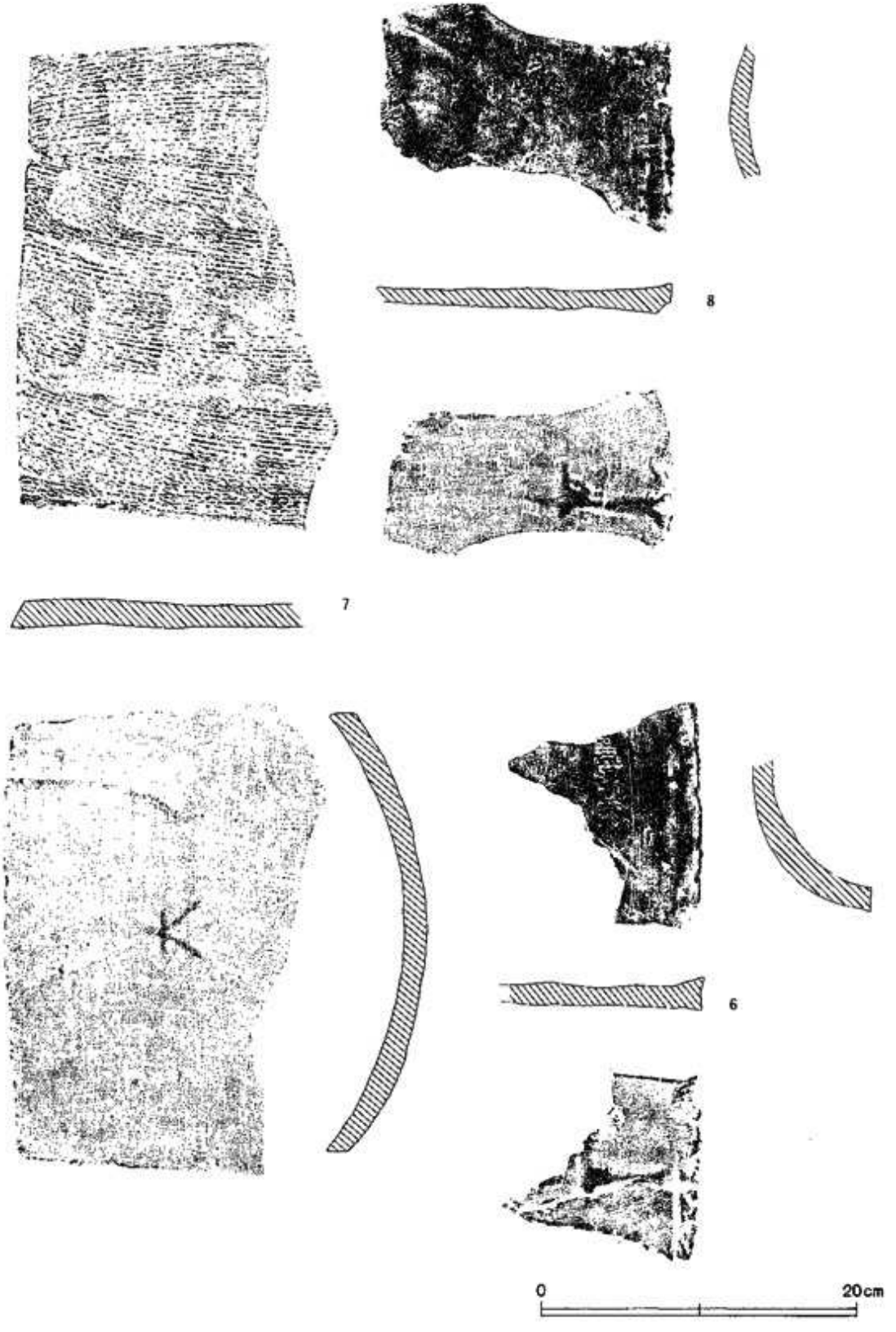
よび側面はヘラケズリを施している。凸面に3cm単位当たり5本の縄叩きを円弧状に施す。一枚造りである。胎土は、粘性をもち、砂粒子、雲母片、石英を含む。焼成良好。色調は赤褐色。

第2類

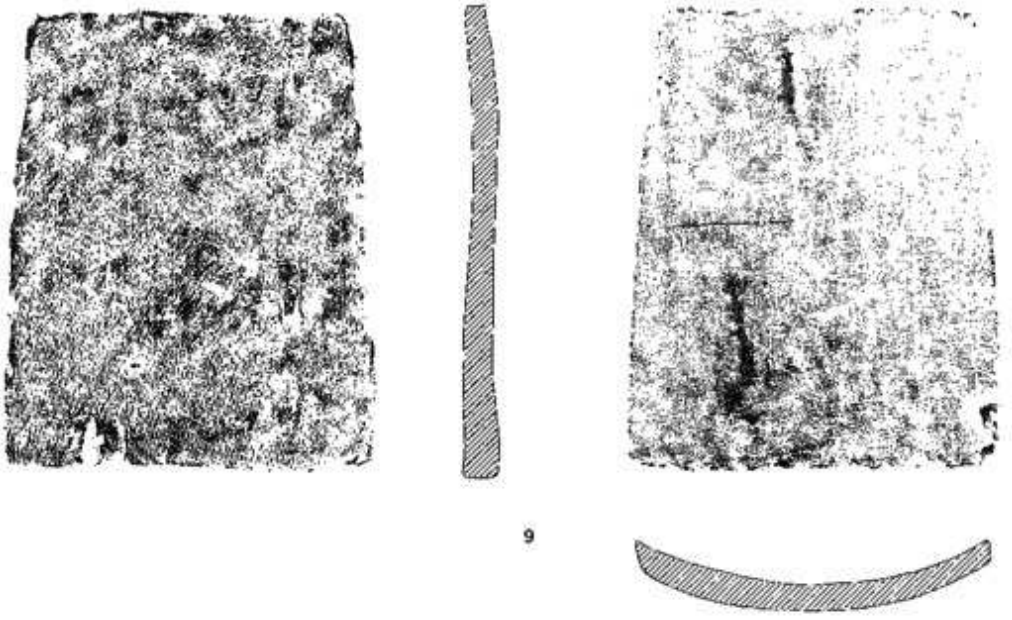
9・10は、部分的に縄叩きを施した後、全体に横方向のナデを施す。粘土紐一枚造り広端寄りに「T」型の横骨痕が観察される。9は、厚さ1.0〜1.7cmを測る。凹面には3cm単位当たり縦26本×横24本の布目痕をもつ。広端部はスサ圧痕が見られ未調整である。側面は縦方向のヘラケズリを施している。胎土は、きめ細かく緻密でやや粉っぽく砂粒子を含む。酸化焔焼成でやや良好。色調は褐灰色を呈する。10は、厚さ1.0〜1.2cmを測る。凹面には3cm単位当たり縦24本×横27本の布目痕



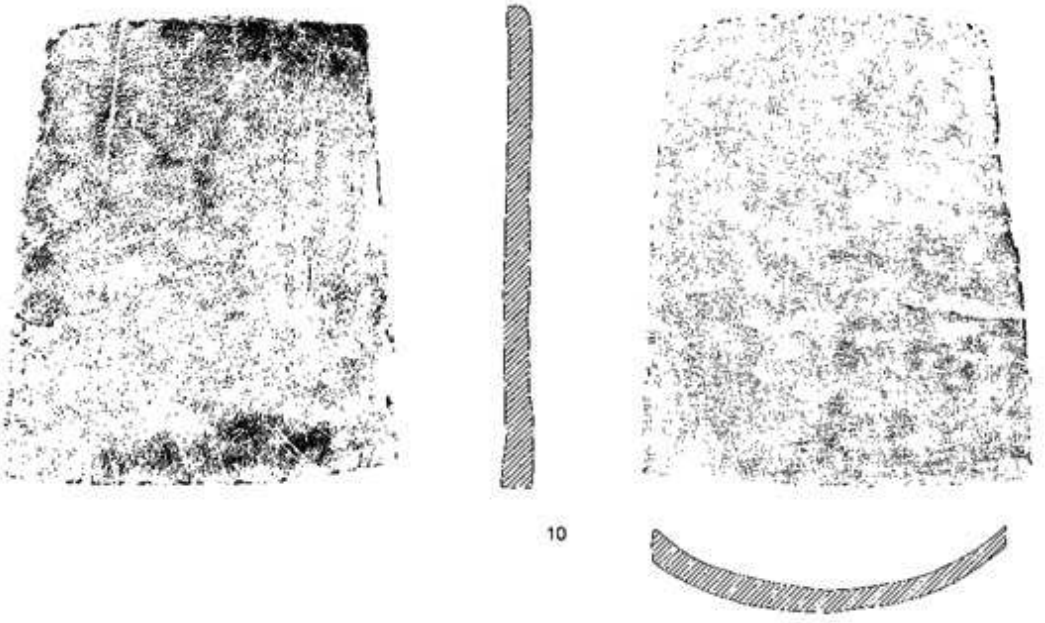
第9図　新開窯跡（1）



第10図　新開窯跡（2）



9



10

0 20cm

第11図　新開窯跡（3）

をもつ。広端部はスサ圧痕が見られ未調整である。胎土は、きめ細かく緻密でやや粉っぽく砂粒子を含む。酸化焔焼成でやや良好。色調は褐色を呈する。

年代

新開窯跡の時期については、これまで、10世紀中葉と考えられてきたが酒井氏は「埼玉県の須恵器の変遷について」の中で9世紀末から10世紀にかかる時期としている。この年代的根拠は、1号工房跡出土の須恵器坏・高台付坏椀が主体で坏は東金子窯跡群と比較してD－1・3号と形態はにているが全体に一回り大きい。この1号工房跡からK－90の灰釉陶器が出土している。また、平瓦の凹面に模骨文字「大」が記されており、この模骨文字「大」は同型ではないが国分寺の塔再建期の文様と類似していることをあげている。

第3節　集落・その他の遺跡

栗谷ツ遺跡

立地と環境

栗谷ツ遺跡は富士見市水子の柳瀬川左岸に位置し、柳瀬川を直接臨む台地上に存在するのではなく、柳瀬川に注ぐ狭長な小流の一つである「不動様の流れ」の水源部北側台地上に細長く形成された遺跡である。台地上の標高は約21m、支谷の沖積地との比高差は7m、須恵器窯址の検出された台地斜面下部では14m、比高差は1mを測る。ここは土地区画整理事業に係わる発掘調査や、宅地開発に先立つ調査などで比較的内容が明らかな遺跡の1つである。これまで26回の調査が行われ、遺跡面積約55,000m²に対して約4分の1の調査が終了している。その結果、旧石器時代から平安時代までの遺構・遺物が検出されている。平安時代では住居址39軒、須恵器窯址1基などがあり、注目される遺跡となっている。

出土遺物（第12～14図）

軒平瓦

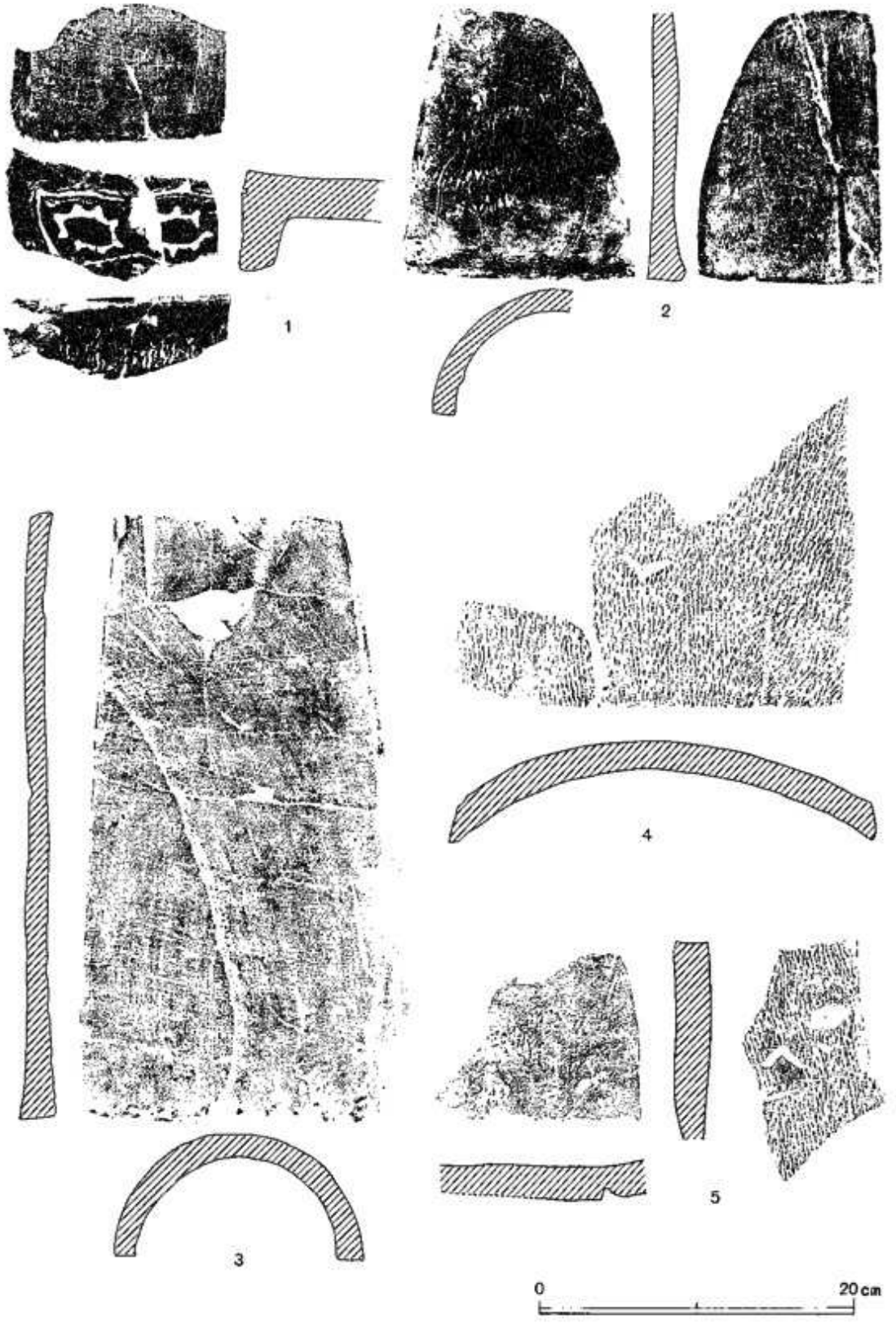
1は手描きの沈線によって内外区を区画する瓦当面を持ち、内区文様は楕円の周囲に8つの突出があるスタンプ文である。瓦当面の厚さは、3cmで、顎は段顎。平瓦部分は凸面に縄叩きが施されるが、顎側はナデ消されている。凹面の布目は3cmあたり20本で、側端部は面取りが施されている。胎土には白色砂粒を含み、色調は灰色であるが、一部赤灰色となる。焼成は良好。1号窯出土。

丸瓦

2・3とも凸面は縄叩きが施されるが、ほとんどすり消されている。凹面布目は3cmに18本で、布のとじ跡が残るが、とじ方は不明。側端面はタテ方向にヘラケズリされている。3は8か所の粘土帯の接合部分が確認出来る。胎土は微砂粒を僅かに含有し、色調は2が赤灰色、3が灰色。焼成は2が不良、3は良好。2は1号窯出土、3は3号住居跡カマド出土。

平瓦

4～7はいずれも凸面に縄叩きを施し、凹面には布目痕を残している。布目は3cmに5は22本、



第12図　栗谷ツ遺跡

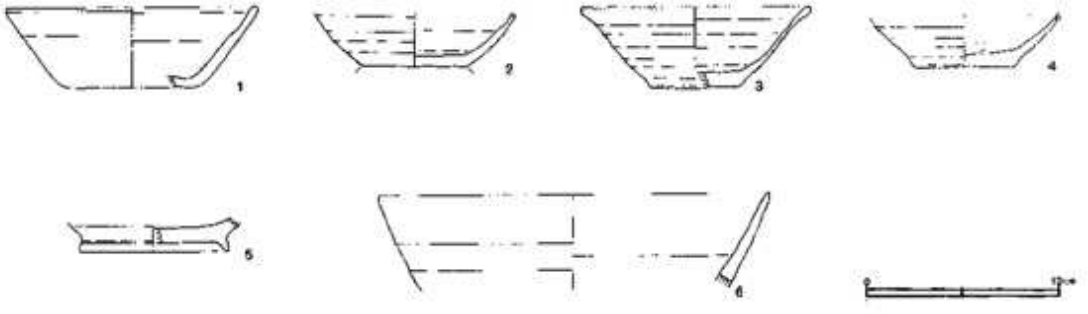
6が縦18本×横17本、7が縦15本、横18本である。4の凹面には一部ナデの痕跡が、4・5の凸面には「入」と考えられるヘラ描き文字がみられる。端面はいずれもヘラケズリが施されている。胎土は5が微砂粒を僅かに含有、4が白色微粒を少量含有している。色調は4・5が灰色を呈し、焼成は良好である。4・5が23号住居跡出土、5・6が1号窯出土である。

土器

3は坏形土器で、口径11.9cm、底径4.5cm、器高4.2cmをはかり、胎土は緻密で砂粒・赤色粒子・白色粒子を微量含有する。色調は黒褐色を呈し、焼成は良好。1は坏形土器で、口径13cm、底径7cm、器高4.2cmをはかり、口縁部下半と底部外周がナデられている。胎土は粗く、雲母・砂粒を含有する。色調は淡褐色を呈し、焼成はやや不良である。4は坏形土器の底部で、底径は5cm。胎土は砂粒・白色粒子・雲母を含有、色調は黒褐色を呈し、焼成は良好である。2は坏形土器の底部で底径5.4cmをはかる。胎土はやや粗く、砂粒・赤色粒子・白色粒子・雲母を含有。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好。5は高台付の坏形土器で、高台外径7.8cm、高台高5㎜をはかり、胎土は砂粒・雲母を含有。色調は灰白色を呈し、焼成はやや良好である。高台は付高台で、接合部はナデられている。6は鉢形土器で、口径20.2cmをはかる。胎土はやや粗く、砂粒・白色粒を含有。色調は黒灰色を呈し、焼成は良好である。底部の残るものはいずれも糸切り離しで、2・3・4は成形痕からロクロが右回転である。いずれも1号窯出土で、他に甕形土器の底部や耳皿が出土している。図示していないが、23号住居跡からは50個体以上の坏形土器が出土しており、土器・瓦の工房跡と考えられている。住居跡からは風字硯・須恵器皿形土器・広口壺・高台付坏形土器、土師器甕形土器・椀形土器が出土している（佐々木・田代1979・今井他1986）

年代

酸化焔焼成の須恵器坏形土器が主体を占めること、耳皿が出土していること、飛雲文をイメージした様なスタンプ文の軒瓦、23号住における坏形土器の口径の底部に対する比率が35～44％であることが鍵となろう。10世紀後半から11世紀前半内に年代を与えている研究者が多い（松本1981、服部1982、高橋・宮1983）。



第13図　栗谷ツ遺跡

東台遺跡

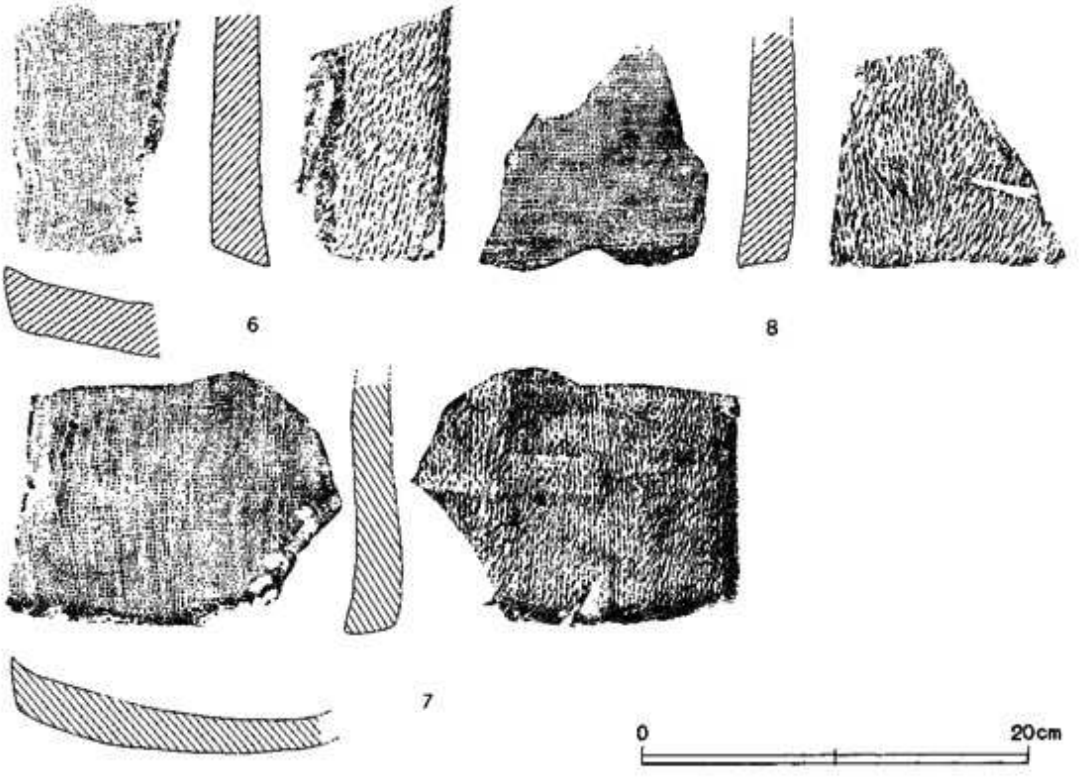
立地と環境

東台遺跡は富士見市水子の柳瀬川左岸に位置し、柳瀬川に向かってやや突出したような台地平坦部に形成された遺跡である。標高は約20m、台地下の沖積地との比高差は約11mを測る。遺跡の総面積約60,000m²に対して、これまでの12回の調査はその1割にも及ばず、調査地点も限定されているが、旧石器時代から中世にかけての多くの遺構・遺物が検出されている。平安時代の住居址が18軒、その他堀立柱建物址・土壙・溝状遺構などが検出している。

出土遺物（第14図－8）

平瓦

8の凸面には縄叩きが施され、凹面には3cmで19本の布目痕を残し、端面はヘラケズリが施される。胎土は赤褐色粒子を含有し、色調はにぶい橙色。焼成は不良。2号住居跡カマド出土。

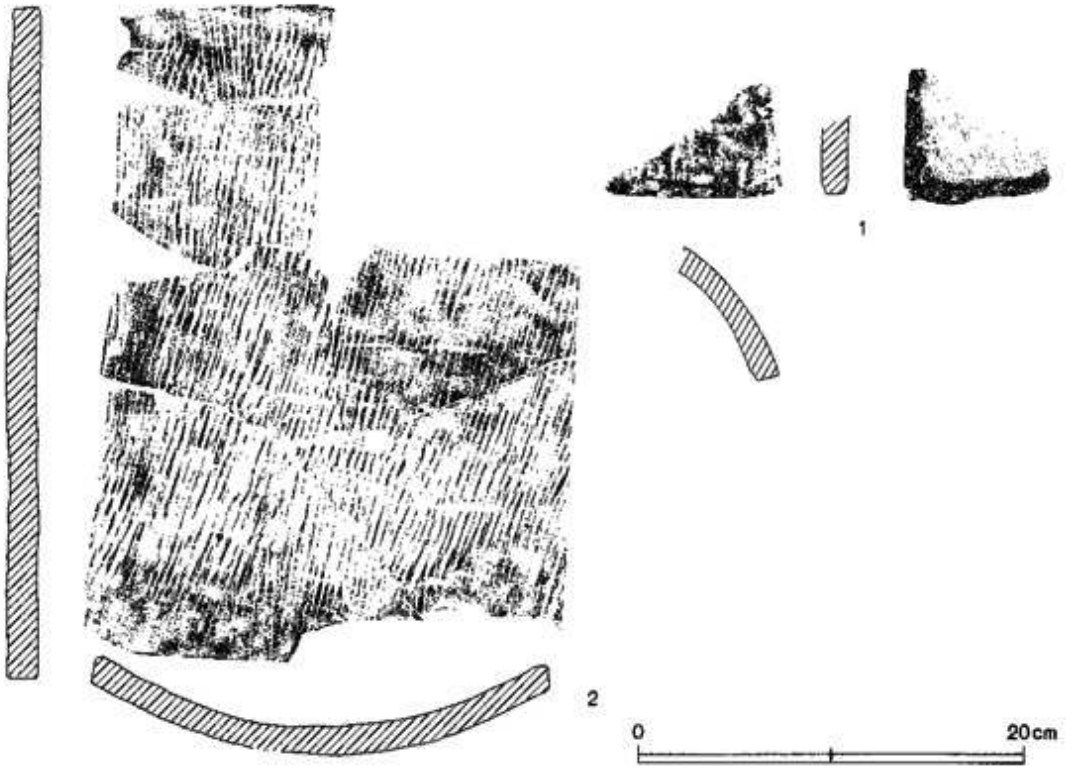


第14図　栗谷ツ遺跡・東台遺跡（8）

旭原遺跡

立地と環境

遺跡は飯能市大字中居字旭原30他に所在する。ＪＲ東飯能駅の北約1km、標高113～116mに位置し、遺跡の東端はＪＲ八高線と、南端は聖望学園と、西端は県道飯能寄居線と接している。遺跡は秩父山地から東方に突出した高麗丘陵上にあり、北方約1.5kmには宮沢湖・高麗峠がある。



第15図　旭原遺跡

住居跡は４軒検出されており、瓦はすべて覆土中からの出土である。なお発掘調査は昭和63年８月22日～10月21日に実施され、未報告であるが、飯能市教育委員会の御好意により掲載させていただいた。

出土遺物（第15図）

丸瓦

１の凸面は平行叩きを施した後、横方向のナデによってほとんどが磨り消されており、広端側は面取りされている。凹面の布目は３cmに18本で、側端・広端面側は面取りされている。胎土は砂粒を僅かに含有。色調は灰白色、焼成はやや不良。４号住居跡出土。

平瓦

２の凸面は平行叩きが施されているが、全体的につぶれている。凹面は全面磨き様に磨り消されて布目は残されておらず、各端面側には左回りで面取りが施されている。胎土は微砂粒を僅かに含有、色調は黄灰色、焼成は良好。４号住居跡出土。

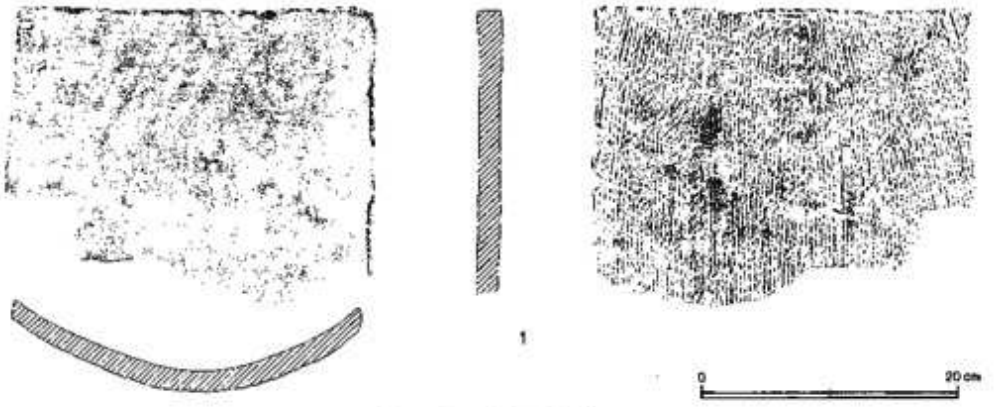
年代

住居跡内の伴出遺物は９世紀後半から10世紀初頭頃の様相を示している。

まま上遺跡

立地と環境

まま上（うえ）遺跡は、入間郡毛呂山町大字西大久保字まま上に所在し、高麗川左岸、毛呂台地の南東部



第16図　まま上遺跡

に位置する。葛川の南側に形成された段丘状台地縁に沿って、南北約400mの広い範囲で遺物の濃密な分布が認められる遺跡である。標高約43mの平坦な台地で、高麗川沿いの沖積地との比高は約6m前後である。遺跡範囲の東側は、坂戸市域にもかかっていると思われる。

近年、遺跡内には住宅建築等の小規模開発が進行しつつあり、個人住宅建築等に係る発掘調査が、すでに6次にわたり毛呂山町教育委員会によって行われている。

6次にわたる発掘調査で、縄文時代中期後半の加曽利E期の住居跡4軒、縄文時代後期初頭の称名寺期の土壙1基、平安時代の住居跡10軒等が検出されている。遺構の分布は広範にわたり、大規模な集落の存在が推察される。

出土遺物（第16図）

平瓦

平瓦の狭端部が出土している。凹面は3cm単位28×21本の布目痕。側・狭両端面を面取りする。凸面は3cm単位4×8本の縄叩き。叩き後の調整はない。胎土は白色針状物質を含む。色調は暗灰色。焼成は良好である。凹面中央やや右よりの位置で狭端から約2.5cmの所に、指頭大の浅い凹みがある。第5号住居床直上出土。

川崎遺跡

立地と環境

川崎遺跡は、上福岡市川崎字宮後、宮脇、宮前に所在する。遺跡は、古入間湾を臨む荒川右岸、武蔵野台地の縁辺の舌状台地上に位置する。標高は約10mを測る。発掘調査は、昭和49年度に第1次調査が実施されてからすでに第　次調査におよぶ。これまでの調査によって確認した遺構は、縄文時代前期・古墳時代前期・後期・奈良・平安時代および中近世である。瓦は主に第1・2次調査の時に出土している。いずれも丸瓦・平瓦の小片である。

出土遺物（第17図）

丸瓦

1は丸瓦の小片である。厚さ1.5cm、残存部での推定径15.2cmを測る。凸面は横方向のヘラナデを施す。凹面は3cm単位当たり縦31本×横32本の非常に細かい布目痕をもち、S型の布目の綴じ方が

斜めに観察できる。側面は狭端部から広端部方向のヘラケズリを施す。全体に摩滅著しい。胎土は4㎜大の白色礫がわずかに含まれる。焼成良好。色調は灰色で凸面は黒色で光沢がある。凹面中央部に粘土紐の接合部分が横方向に観察でき紐造りであることが考えられる。

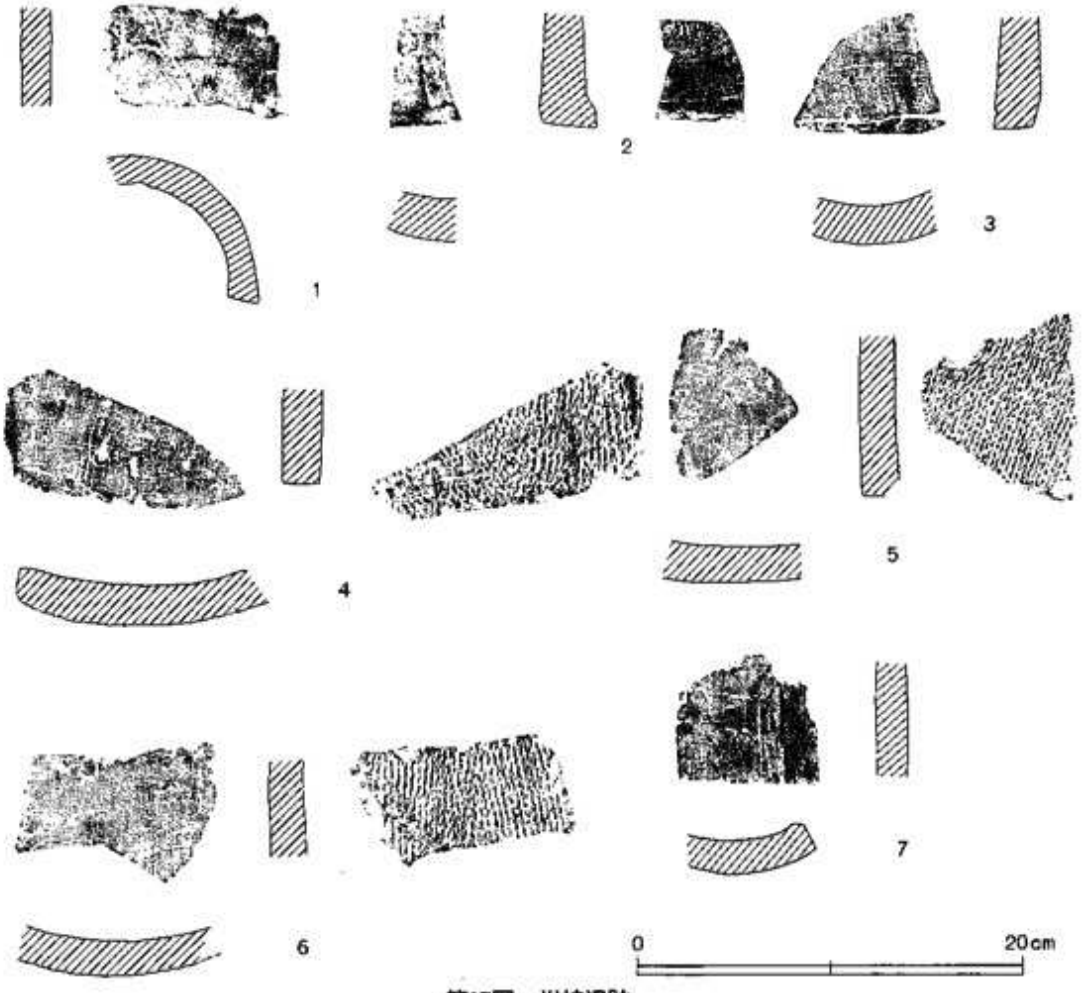
平瓦

第1類

2は、凸面に縄叩きを部分的に施した後にナデを加えている。厚さ2.0〜2.8cmを測る。凹面には1cm単位当たり縦7本×横11本の布目痕をもち、広端側に0.8cmの幅で横方向のヘラケズリを加えている。広端部は横方向のヘラナデを施している。凸面に単位は不明であるが一部縄叩きを施す。粘土板の一枚造りと考えられ、瓦を立てて乾燥させた際の棒状の浅い窪みが観察され広端は肥厚している。胎土は白色砂粒を若干含む。焼成良好で須恵質である。色調は黒灰色を呈する。

第2類

3・7は、凸面をヘラケズリを施して縄叩きを消している。3は、厚さ2.0cmを測る。凹面には3cm単位当たり縦25本×横25本の布目痕をもつ。広端側に布の端部を綴じ込んだとみられる窪んだ痕跡がみられる。広端部はナデを軽く施している。凸面は広端部に近いためか横方向のケズリを施す。



第17図　川崎遺跡

胎土は微小礫を若干含む。焼成やや不良である。色調は暗灰色を呈する。7は、厚さ1.7cmを測る。凹面には3cm単位当たり縦24本×横29本の布目痕をもつ。凸面は縦方向のヘラケズリを施して縄叩きを消す。胎土は微小礫を若干含む。焼成やや不良である。色調は明灰色を呈する。

第3類

4・5・6はいずれも凸面縄叩きを施している。4は、厚さ2.1cmを測る。凹面には3cm単位当たり縦18本×横21本の布目痕をもち、端部の一部には縦方向のヘラケズリを施す。広端部および側面にはヘラケズリを施している。凸面に3cm単位当たり縦7本×横8本の縄叩きを施す。粘土板の一枚造りである。胎土は、白色微粒子を若干含み、細砂粒子を混在。焼成良好。色調は灰色を呈する。5は、厚さ1.6〜1.8cmを測る。凹面には3cm単位当たり縦24本×横21本の布目痕をもつ。凸面に3cm単位当たり縦9本×横6本の縄叩きを施す。粘土板の一枚造りである。胎土は、白色微粒子を若干含み、細砂粒子を混在。焼成やや不良。色調は灰色を呈し、器内の中央は赤味を帯びる。6は、厚さ1.8cmを測る。凹面3cm単位当たり縦27本×横22本の布目痕をもつ。広端部はヘラケズリを施している。凸面に3cm単位当たり縦12本×横6本の縄叩きを施す。粘土板の一枚造りである。胎土は、白色微粒子を若干含み、細砂粒子を混在。焼成不良。色調は黄灰色を呈する。

年代

いずれも、小破片であることから年代の根拠には乏しい。胎土から東金子窯跡産と推定でき、布目の本数や縄叩きの状況から入間市霞川遺跡出土の瓦等に近似している点などから国分寺再建以降の資料と判断し9世紀中葉頃としたい。9世紀中葉と考えられる。

若葉台遺跡

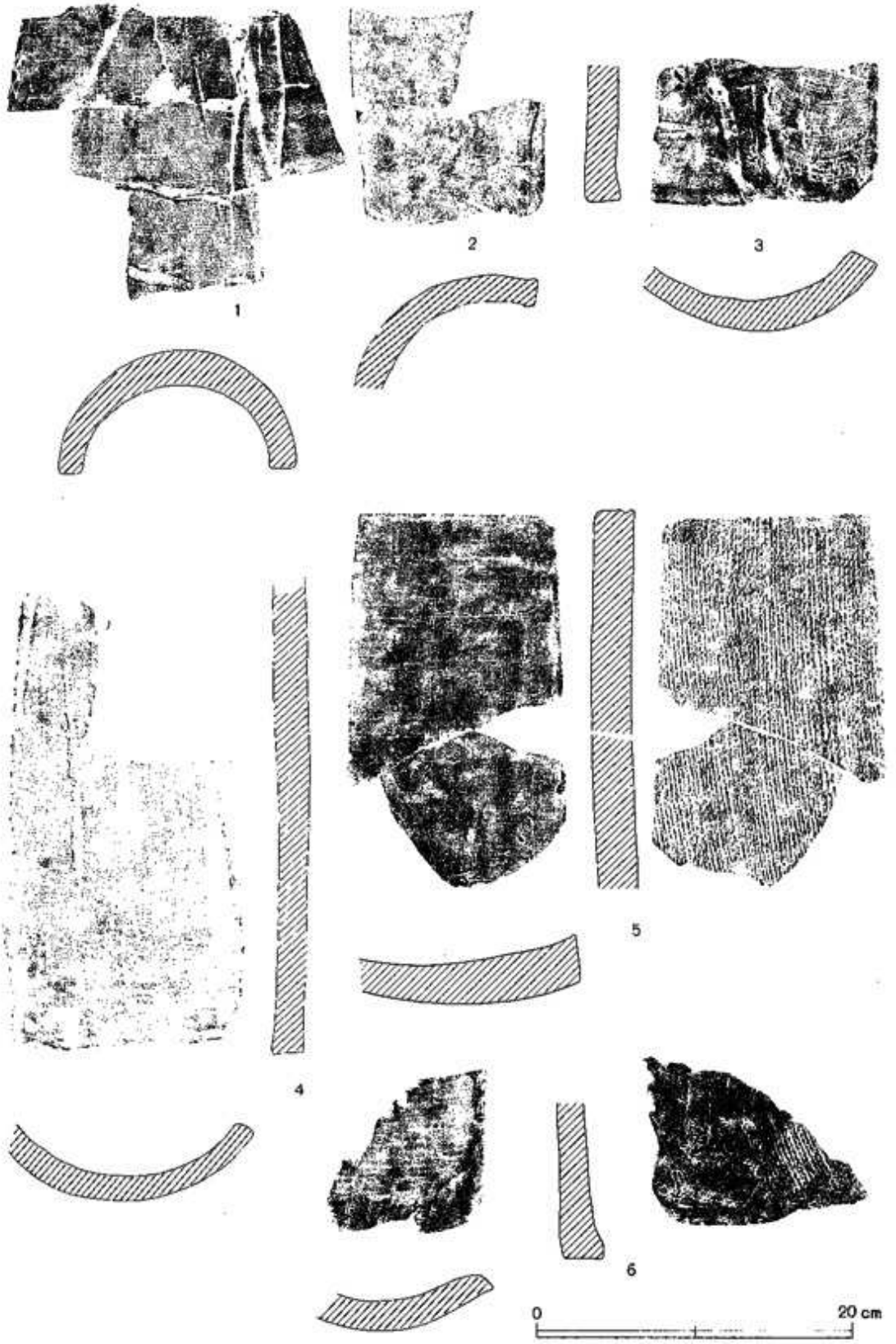
立地と環境

若葉台遺跡は東武東上線若葉台駅より東に約750m離れた坂戸市千代田、鶴ヶ島町富士見の行政区境に跨った位置にある。本地域は現在広範囲に渡り平坦で地形的特徴はなく、現状の地形から遺跡の成立時期の土地、環境状況を推察するのは難しい。発掘調査は数次に渡り、坂戸市、鶴ヶ島町の双方で実施されてきたが、本遺跡の範囲をどこで区切るかは今後の問題である。本遺跡はかつて、掘立柱建物遺構の規模の大きいこと、倉庫群の多いことなどから入間郡衙跡ではないかという説があったが、未だ、郡衙を決定づける遺物等の出土に恵まれていない。現段階では調査自体も部分的でしかないため、本遺跡の性格は、8世紀〜10世紀初頭に至る期間継続的に営まれた集落跡と捉えておきたい（斉藤稔他1984）。

出土遺物（第18図）

丸瓦

1と2は丸瓦であるが、凹面布目痕の粗さが異なる（1は3cm単位当たり17×21本、2は同じく16×11本）。1は凹面に指による磨り消しが部分的に横位に施される。また縦に、粘土紐ならびに布の合わせ目も観察できる。側面はていねいにヘラケズリされ、面取りも行われる。凸面はていねいなヘラケズリ。胎土は砂粒を含む。色調は灰褐色。焼成はやや不良である。紐土紐の幅は約6cm。2は1と同様粘土紐作りである。側面はヘラケズリ、面取りが行われる。凸面はヘラケズリ後、部



第18図　若葉台遺跡

分的にナデられている。胎土は砂粒、白色粒子を含む。色調は灰褐色。焼成は良である。1はK地点2号住居跡出土、2はK地点2号井戸出土である。1は伴出している須恵器では10世紀初頭の年代が考えられる。

平瓦

3と4の凸面は磨り消しのため、叩きの種類は不明だが、5と6は縄叩きが明瞭に残る。3は凹面に部分的な指によるナデが行われる。布目は2種類が観察でき、荒い方は3cm単位20×20本、細い方は39×39本である。布目の境いが粘土の合わせ目のようである。広端を隅切りしている。4は凹面布目18×26本。凸面をヘラケズリの後、ナデている。側面はヘラケズリ、面取りが施され、広端を3と同様に隅切りする。3、4ともに胎土は白色粒子、砂粒子を含む。色調は灰色～褐灰色を呈し、焼成は良好である。5は凹面布目が22×24本。凸面の縄叩きは3cm単位7本である。叩き目は、粘土が柔らかなうちに施されたため半分ほどがつぶれている。胎土は礫を含み、色調は灰色。焼成は良好である。5はJ地点1号住居跡のカマドから出土しており、補強材として作われていたようである。なお、伴出する須恵器は10世紀初頭のものである(斉藤稔他1984)。6は凹面布目31×31本。縁辺をヘラケズリする。凸面は縄叩き（3cm単位9×11本）後、ヘラによる磨り消しが施される。広端面が若干肥厚し、断面形は軒瓦を連想させる。胎土は白色粒・砂粒を含み、色調は淡橙褐色。焼成はやや不良である。なお、5は粘土紐一枚造りである。

年代

確定的な根拠に乏しいが、調整・技法上、国分寺再建以降の資料と考えられる。伴出遺物の年代も関連させるならば、9世紀後半～10世紀初頭の年代が与えられよう。

東の上遺跡

立地と環境

東の上遺跡は、埼玉県所沢市大字久米、南住吉地区に所在する。柳瀬川によって開析された所沢台地の南側縁辺に立地し、その崖線に平行しながら展開している。そのため遺跡景観は崖線に規制されながら帯状の広がりを見せている。範囲は主要地方道東京・所沢線が東側の境界と考えられ、西側は県立所沢高校校庭付近、南北は台地肩部から行政道路までと考えられる。幅1km、奥行き400m、狭山丘陵にその水源を求めることができる。丘陵内の流路は概ね東方向であるが、数多くの支谷が物語るように複雑な浸食を行っていたと考えられる。台地部分へ移行すると東方向から北東方向へ変え、流路自体も直線を維持しながら流下する。対称的な様相といえる。東の上遺跡は丁度この接点に位置するもので、その後柳瀬川は約10kmの市内坂の下地区で東川と合流、新河岸川を経て最後に荒川に注がれる。遺跡正面に遠望できる『八国山』は、狭山丘陵の最東端部に張り出す支脈である。丘陵は市内南西部から東京都の一部にかかる紡錘形をした独立丘陵で、東西10km、南北3.5kmを測る。平坦な台地上に島状に突出した理由として、古多摩川の浸食作用を直接受けたと考えられている。八国山の裾部には通称『大谷田圃』と呼ばれる谷戸田が近年まで存在していた。高燥な台地で占められている当地域では数少ない水田可耕地といえる。当遺跡と関連性のある場所と考えられる。

東の上遺跡の存在を初めて明らかにした調査は、昭和25年、大護八郎氏を中心とした発掘調査である。住居跡1軒が報告されている。その後、市教育委員会が昭和50年に東の上遺跡第1次調査を行い、以後、現在（平成2年2月）までに38次調査に達している。当遺跡は、旧石器時代・縄文時代・弥生時代も包含されるが、主に奈良・平安時代を中心とした集落跡である。概調査は遺跡全体の約20％程度であるが、住居跡170軒・掘立柱建造遺物14棟、道路跡2本、その他溝跡や特殊土坑等も発見されている。これらの遺構は、出土した遺物によって8世紀から10世紀までのおよそ200年間にわたって形成されたことが明らかになっている。発見された遺物は土師器と須恵器が一般的であるが、その他として鉄器（鎌・鋤・鉄斧・鉄鏃・刀子・鑿・轡・焼印）、装身具（青銅製丸鞆・表金具・同裏金具・小玉・渡銀製品・金環）、円面硯、須恵器坏形土器の転用硯・墨書土器・瓦類・緑釉陶器・馬骨等があげられる。38次にわたる調査によって得られた成果を考慮すると、本遺跡は少なくとも市域のなかでは、一般的な集落跡とは異なる性格を持ち、該期の拠点的な集落であると推定される。（飯田充晴）

出土遺跡（第19図）

丸瓦

1は狭端面の破片で、凸面は縦のヘラケズリ、凹面は3cmあたり16×19本の布目痕を残し、部分的に押圧痕がみられる。2は狭端部の破片で、凸面及び側面はヘラケズリ。凹面は3cmあたり20×20本の布目痕を残す。桶巻造り。1は暗茶褐色、2は青灰色を呈し、ともに石英、砂粒、透明白色粒を含む。1、2とも焼成良好。

平瓦

第1類

4は広端面の破片。凸面は縄叩き後、指による横方向のナデで磨り消している。凹面は3cmあたり25×29本の布目痕を残す。側面のヘラケズリは粗い。一枚造り。色調は灰色を呈し、白色粒、黒色粒を含む。焼成は良好である。

第2類

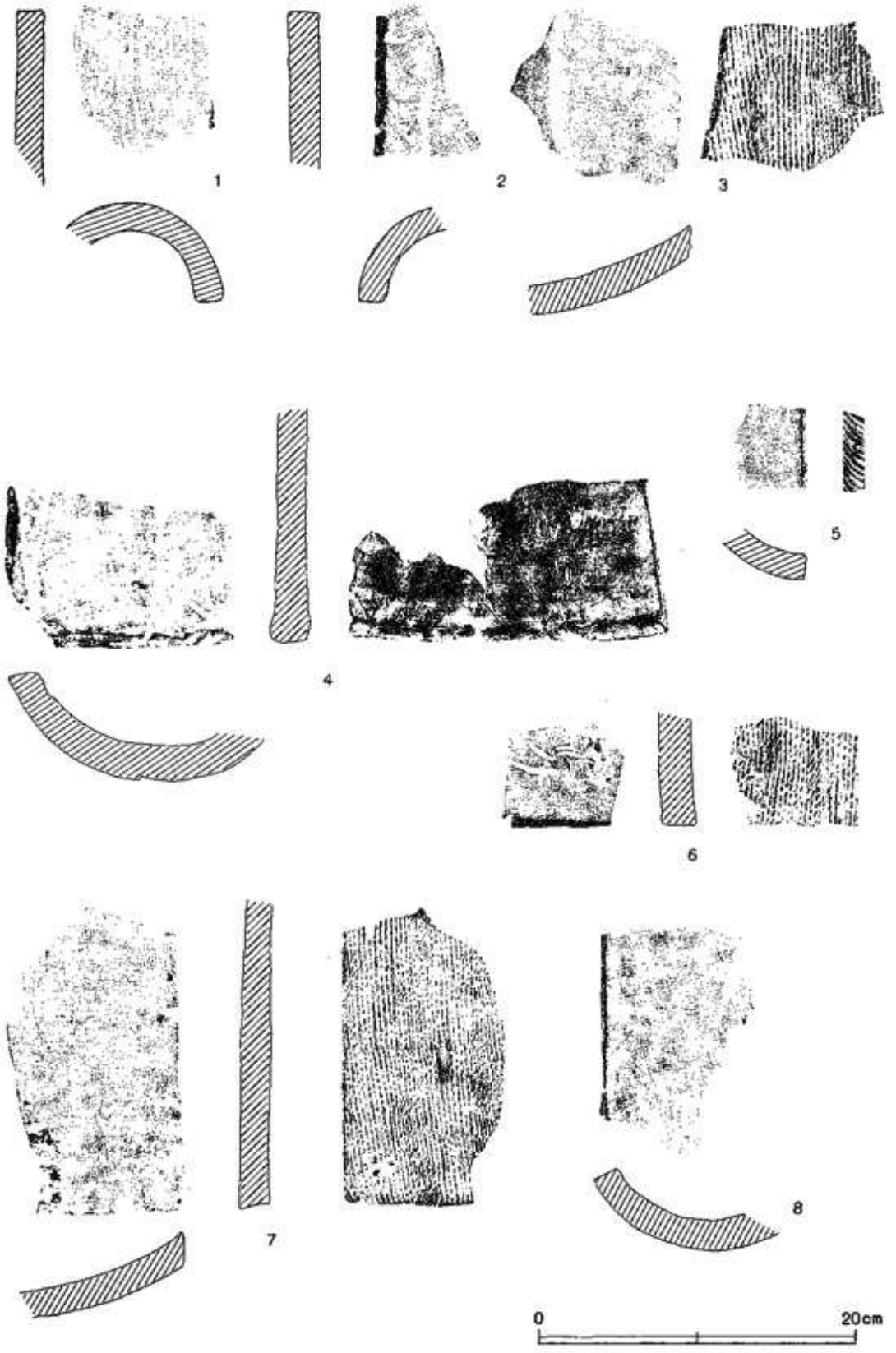
3・6・7は凸面に縄叩き、凹面に布目を残す小破片である。縄叩き、布目は細かい。3は3cmあたり28×28本、6は30×27本、7は27×24本の布目痕を残す。3は凹面に模骨痕を残す粘土板桶巻造り、6・7は粘土板一枚造り。色調は3・7は灰褐色、6は暗灰色を呈し、いづれも胎土には赤色粒、石英、白色粒を含み、焼成は良好である。

第3類

5は側端面の小破片である。凸面は横方向のヘラケズリ、凹面は3cmあたり20×20本の布目痕を残す。側面は一部面取りのヘラケズリをするが、粘土塊から切り離した際の糸切り痕を明瞭に残している。色調は黒灰色を呈し、胎土には白色粒、砂粒を含む。焼成は良好である。

第4類

8は側端面の破片である。凸面は横方向のナデ、凹面は3cmあたり26×32本の布目痕を残す。凹面には横方向に幅2.3～3cmで割れが生じているが、これは粘土紐の接合部にあたる。また、斜め方向に模骨痕も認められ、粘土紐桶巻造りの可能性がある。色調は灰色を呈し、胎土には赤色粒、砂



第19図　東の上遺跡

粒を含む。焼成は良好である。

西内手遺跡

立地と環境

狭山丘陵には小河川の浸食が激しく複雑な地形を形成している。丘陵部から台地部へ移行すると浸食谷を臨むように弥生～歴史時代の集落跡の展開が一般的である。西内手遺跡は、集落と谷との関係を具体化させる目的で行っている。約300m²に及ぶ谷底と両谷壁を調査し、谷頭部には、歴史時代の住居跡2軒を検出している。瓦は表土層より出土している。（飯田充晴）

出土遺物（第20図1～5）

軒丸瓦

1は内区から天井部にかけての単弁4葉軒丸瓦の破片である。周縁は素文とみられ、内側に細い界線、さらに内側に太い界線が巡る。弁数は4弁と考えられる。瓦当裏面は指によるナデが丸瓦部との接合部まで及んでいる。色調は灰色を呈し、胎土は白色小礫、微砂粒を含む。焼成はやや不良である。

丸瓦

2は側端面の小破片である。凸面は横方向、側面は縦方向のヘラケズリが施されている。凹面は3cmあたり23×24本の布目痕を残す。色調は灰色を呈し、胎土は小礫を含む。焼成は良好である。3は狭端部の破片である。凸面は縄叩き後、横方向のヘラケズリと縦方向のナデによって大半を磨り消している。側面は縦のヘラケズリされる。凹面は3cmあたり20×24本の布目痕を残す。また、布の綴じ合わせ目の痕跡は明瞭で、斜め方向に合わせ目が入っている。色調は黄褐色、胎土は赤色粒、石英、白色透明粒を含む。焼成はやや不良である。粘土紐桶巻造り。

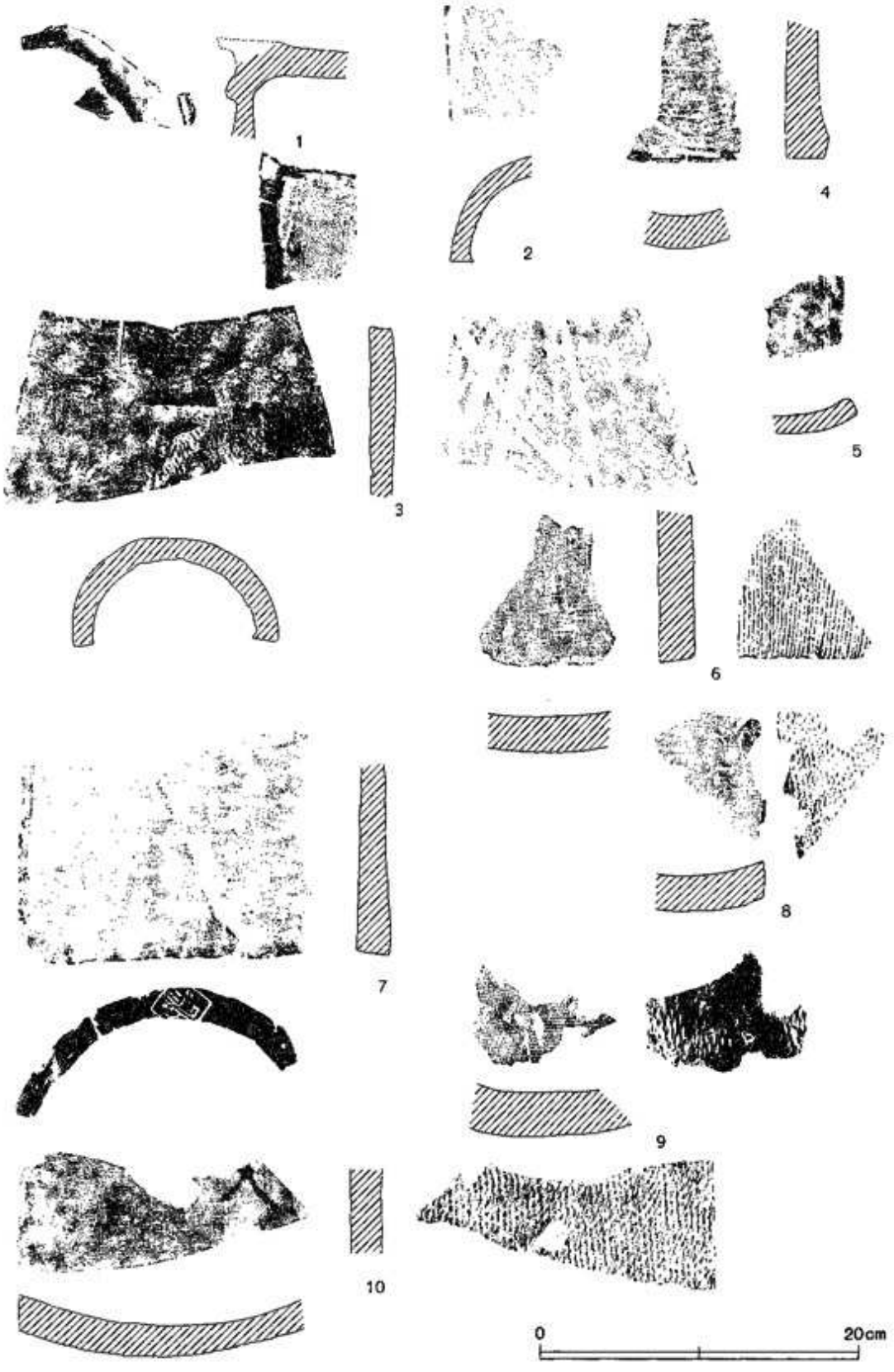
平瓦

4は広端面の破片で、端面は幅広で左から右へのヘラケズリによって面取りされる。凸面も横方向にヘラケズリされる。凹面は3cmあたり28×24本の布目痕を残す。小破片であるが、幅2.5cm程の模骨痕が認められる。また、端部付近には紐状の圧痕が残る。色調は灰色、胎土は白色微粒含む。焼成は良好である。粘土紐桶巻造りの可能性が強い。5は側面の破片である。全体に磨滅しているが、側面は縦方向のヘラケズリ、凸面は横方向のナデが施される。凹面は3cmあたり19×18本のやや粗い布目を残す。色調は灰褐色、胎土は小礫を僅かに含む。焼成はやや軟質である。一枚造りと考えられる。

山口城跡

立地と環境

山口城は、武蔵七党のひとつである村山党の村山小七郎家継が平安末期に築城し、室町時代まで存続されたと考えられる県指定旧跡の平山城である。狭山丘陵中央支丘の南斜面から柳瀬川までの緩斜面に立地している。中央部には、西武狭山線、主要地方道所沢武蔵村山立川線が横断し、東西約200m×南北約150mの範囲に堀跡・土塁等の遺構が分布するが、郭状遺構等は不明である。発掘



第20図　西内手・山口城・畦の前・砂川・本村・美園前遺跡

調査は、昭和51年から4次にわたって行われ、古墳時代後期の竪穴住居跡2軒、平安時代後半～室町時代の堀跡が検出され、城跡は改築・拡張が成されていることがわかった。第2次発掘調査（昭和54年）では丸底堀、薬研堀、箱薬研堀等の異なる形状の堀跡が重複して検出された。遺物は、須恵器坏、土師器坏、瓦、かわらけ、板碑等が出土した。瓦が出土したD堀跡は、平安時代後半に比定され、幅2.1m、深さ50cmの丸底状の堀跡で流水状態にある水堀として捉えられた。　（中島岐視生）

出土遺物（第20図6）

平瓦

6は広端面の破片である。凸面は縄叩き、凹面は3cmあたり25×23本の布目痕を残す。端面には工具痕及び指圧痕が認められる。色調は灰色、胎土は小礫を多く含む。焼成は良好である。

畦の前遺跡

立地と環境

畦の前遺跡は、狭山丘陵中央支丘の東端の鞍部から北東方向にくちばし状に開く開析谷の南東斜面に広がる先土器時代～近世の遺構・遺物が複合する遺跡である。現在は市立荒幡小学校である。周辺の遺跡では、南約500m離れた丘陵南斜面（東京都東村山市）から奈良時代に比定される瓦塔が出土している。発掘調査は昭和55～56年に行われ、縄文時代中期の竪穴住居跡33軒、土坑25基、古墳時代後期の竪穴住居跡3軒、平安時代の竪穴住居跡4軒と遺物包含層が検出された。縄文時代の住居跡は丘陵鞍部から斜面上位に環状を呈して分布しているが、古墳時代と平安時代の住居跡は、丘陵斜面を浸食する埋没谷部周辺に分布している。平安時代の出土遺物は、8世紀後半と9世紀後半の須恵器甕、坏、椀、土師器甕、坏、瓦等が出土した。瓦を検出した第40号住居跡は、9世紀後半に比定される。埋没谷の最深部に位置し、表土層が約4m堆積していた。住居跡南半分は流出し、保存状態は不良であった。瓦は、カマド構築材として使用されていた。　（中島岐視生）

出土遺物（第20図7）

丸瓦

7は広端面の破片である。凸面は広端面付近は横方向、その他は縦方向のヘラケズリ、側面は縦方向のヘラケズリによって面取りされる。凹面は3cmあたり21×24本の布目痕を残し、広端面付近は横ナデされる。また、横方向に粘土の歪みや割れが見られることから粘土紐による成形の可能性がある。広端面中央には刻印が押されている。色調は茶灰色、胎土は小礫及び白色針状物質を含む。焼成は良好である。

砂川遺跡

立地と環境

砂川遺跡は、関東地方における旧石器時代ナイフ形石器文化期を代表する遺跡の一つとして全国的に知られている遺跡である。明治大学考古学研究室を主体とした2次にわたる調査（戸沢1968・戸沢・安蒜他1974）によって、A・Fの2地点のローム層中から6ヶ所の石器集中ブロックとナイフ形石器を中心とする多数の遺物が発見された。また、第3・4次調査においては、遺跡中央の凹

地内から、平安時代の住居跡２軒、井戸跡１基が検出された。（並木他1987・粕谷他1988）

遺跡は、狭山丘陵の北側に接する所沢台地北西に位置し、砂川堀と東川に挟まれた標高103～107mの台地上に立地する。平安時代の遺構は、埋没谷の斜面に沿うように配置する。発見された住居跡は、いずれも小形で遺存状態は不良であった。井戸跡は、直径２m、深さ3.5mを計り、坑底から木皿が出土した。本遺跡での奈良・平安時代の遺物散布は非常に稀薄であり、予想外の発見であった。また、瓦片は、第３次調査の住居精査中に発見されたものである。（並木　隆）

出土遺物（第20図８）

平瓦

８は側面の破片である。凸面は縦方向の縄叩きの後、斜め方向の縄叩きが施される。凹面は３cmあたり24×27本の布目痕を残す。側面は縦方向のヘラケズリ。一枚造り。色調は灰色、胎土は小礫を僅かに含む。焼成は良好である。

本村遺跡

立地と環境

本村遺跡は狭山丘陵の北側裾部へ移行する台地部分に展開される遺跡である。分布調査の所見によれば東西100m、南北200mの範囲を持ち、土師器・須恵器の散布が認められる。古墳時代、奈良・平安時代の集落跡と考えられる。発掘調査は、平成１年に約945m²を実施している。住居跡１軒、井戸、土坑等を検出している。瓦は井戸跡の覆土中より出土している。（飯田充晴）

出土遺物（第20図９）

平瓦

９は磨滅が著しい。凸面は縄叩きが施されるが、部分的に磨り消されている。凹面は３cmあたり17×18本のやや粗い布目痕を残す。色調は黄灰色、小礫多量含む。焼成はやや不良である。

美園上遺跡

立地と環境

美園上遺跡は、埼玉県所沢市大字山口字美園上に所在する。立地は10°～15°の狭山丘陵の南斜面に展開されるものである。丘陵を大きく開析する柳瀬川を正面に臨むことができる。東西250m南北300mが遺跡範囲である。遺跡の東側縁辺は市立山口中学校と来迎寺をむすぶ線、南縁は勝公寺西縁と北縁は主脈に向かう支谷と丘陵鞍部と考えられる。

発掘調査は所沢市教育委員会が第１次（昭和48年）、第２次（昭和62年）を実施している。１次は造成工事によってカッテング面に露呈されていた住居跡を調査している。住居跡の大方はすでに削平され尽くしていたが、カマド内とその周辺から古墳時代鬼高期の土師器が８個体出土している。２次は宅地造成に先立って実施したもので、１次の東側隣接地である。平安時代の住居跡１軒と縄文時代早期の土坑の２基を調査している。模骨陰刻文字の認められる布目瓦は、表土中からの出土である。遺構の痕跡は認められなかった。（飯田充晴）

出土遺物（第20図10）

平瓦

10は側面の破片である。凸面は斜め方向の縄叩きが中央付近で重なるように施されている。一単位は縦4cm、横6cm程の叩き板によっている。凹面は3cmあたり30×38本の細かい布目痕を留めている。また、中央部に「大」の凸文字を残す。側面はヘラケズりされる。一枚造り。色調は灰色、胎土は0.4～1cm程の小礫及び白色針状物質を含む。焼成は良好である。

年代

各遺跡はいずれも集落遺跡であるが、東の上遺跡のように帯金具や墨書土器の出土、両側に側溝を持つ道路遺構などが検出され、官衙との関連性が指摘されている遺跡もあるため、周辺を含めた今後の検討課題は多い。出土した瓦は概ね8世紀中葉から9世紀代と考えられる。また、製作技法上、文字瓦が比較的多いことや桶巻造りと一枚造りが併存し、生産地も南比企窯跡群を含む周辺地域に及んでいることは興味深いといえる。

引用・参考文献

佐々木保俊・田代隆（1979）『針ヶ谷遺跡群Ⅰ』富士見市遺跡調査会

高橋一夫・宮昌之（1983）「北武蔵の窯跡」『シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題―相模国と周辺地域の様相―第Ⅱ版』神奈川考古第14号

服部敬史（1982）「南武蔵における古代末期の土器様相」『東京考古1』東京考古談話会同人

松本富雄（1981）『新開遺跡Ⅰ』埼玉県三芳町教育委員会

松尾鉄城（1975）『川崎遺跡』上福岡市教育委員会

藤原高志（1982）「日高町大寺廃寺」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県県史編さん室

中平薫他（1982）『大寺廃寺―第1次発掘調査概報』埼玉県入間郡日高町教育委員会

中平薫他（1984）『大寺廃寺』埼玉県入間郡日高町教育委員会

村木功他（1985）『大寺廃寺跡』埼玉県入間郡毛呂山町教育委員会

飯田充晴他（1982）『東の上遺跡』所沢市教育委員会

飯田充晴他（1988）『畦の前遺跡』所沢市教育委員会

並木隆他（1981）『山口城跡』所沢市教育委員会

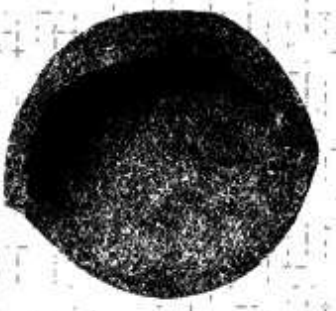
坂詰秀一編（1971）『武蔵新久窯跡』雄山閣出版

斉藤稔他（1984）『若葉台遺跡群―A・B・B地点南』鶴ヶ島町教育委員会・若葉台遺跡発掘調査団

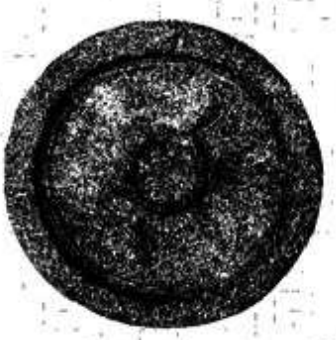
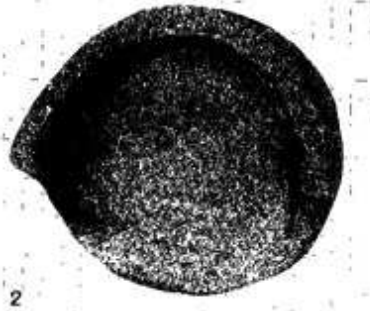
斉藤稔他（1984）『若葉台遺跡群―J・K・L地点発掘調査概報』鶴ヶ島町教育委員会

今井堯他（1986）『富士見市史―資料編2考古』富士見市教育委員会市史編さん室

なお、本稿をまとめるにあたり、所沢市教育委員会飯田充晴氏、並木隆氏、中島岐視生氏、富士見市教育委員会小出輝雄氏、毛呂山町教育委員会村木功氏には御多忙中のところ執筆をしていただきました。また、各教育委員会には資料掲載にあたって多大な御便宜をはかっていただきました。末筆ながら厚く御礼申し上げます。なお、本号をもって『北武蔵における古瓦の基礎的研究』は終了させていただきます。

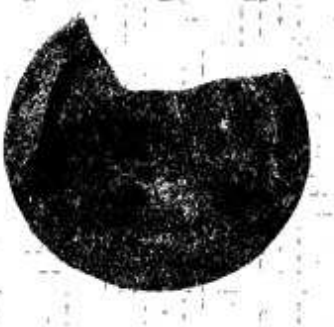


1
5

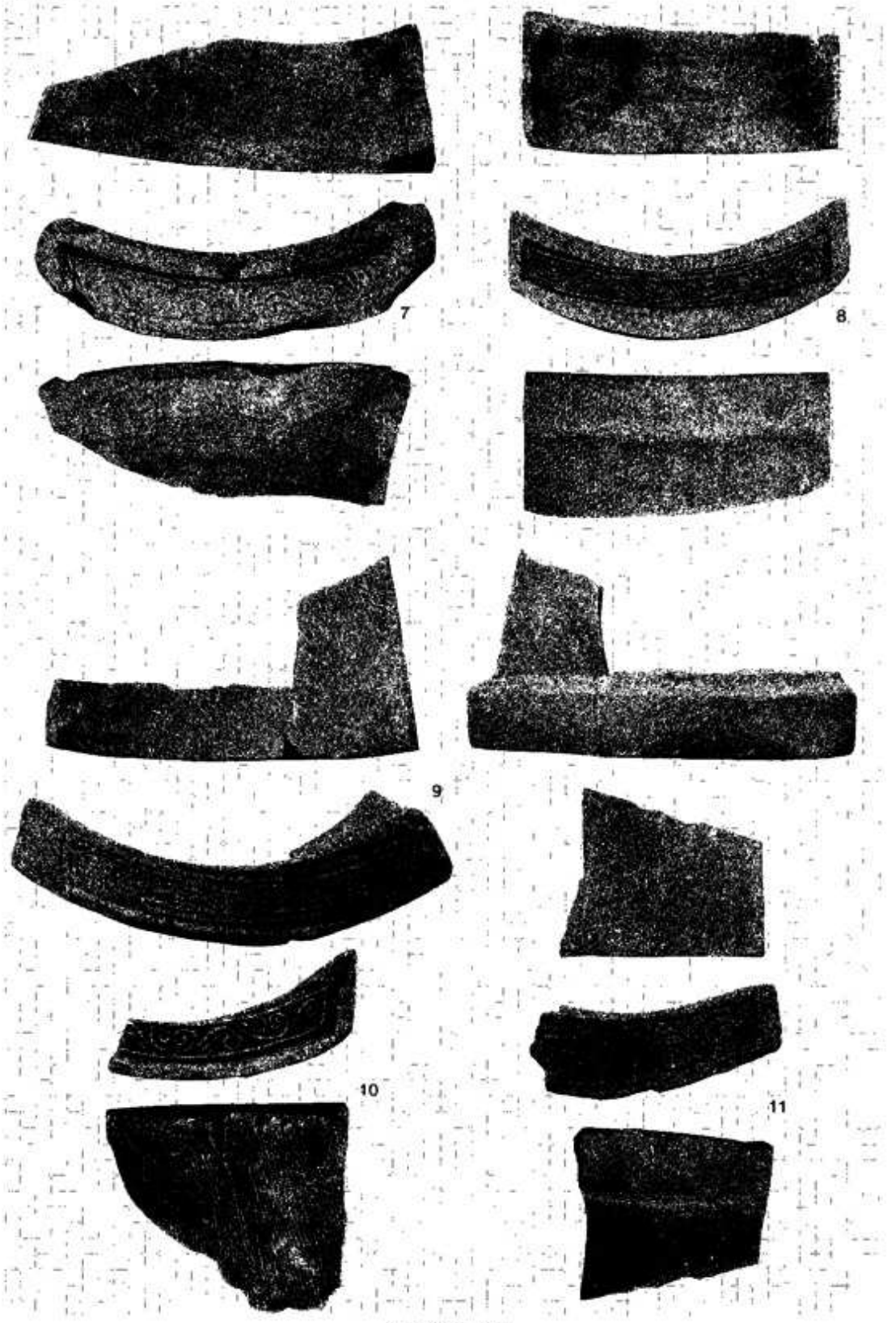
2
6

3

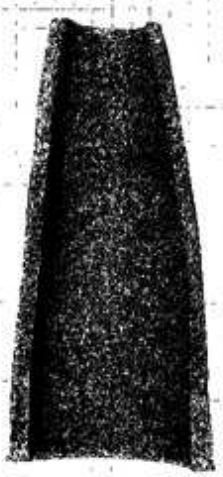

4

新久窯跡（1）

図版 2



新久窯跡（2）



12

13

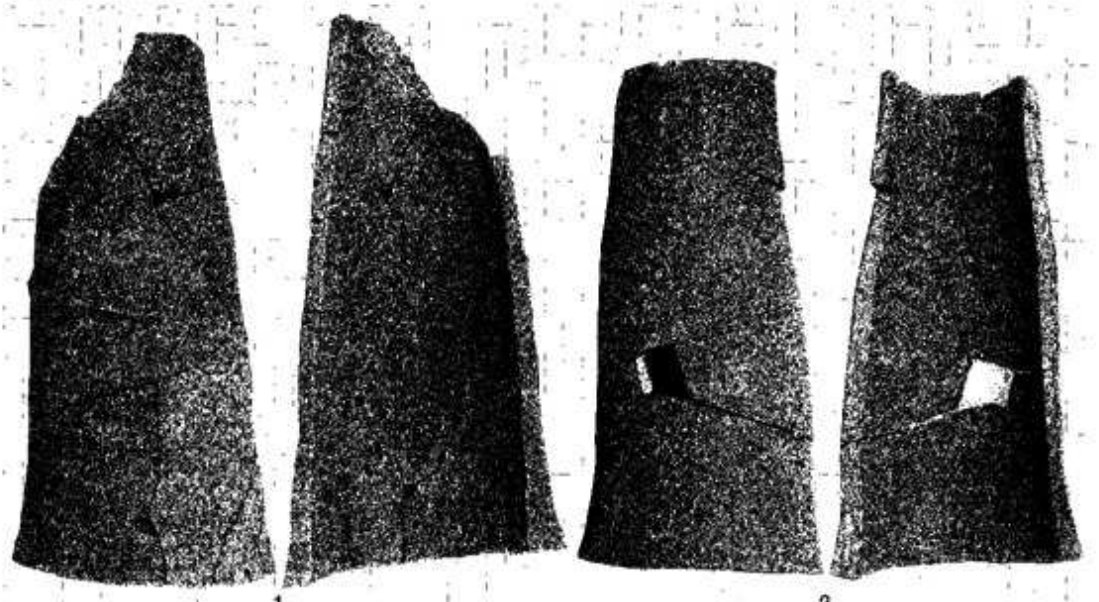
14

16

15

新久窯跡(3)—12～15　旭原遺跡—16

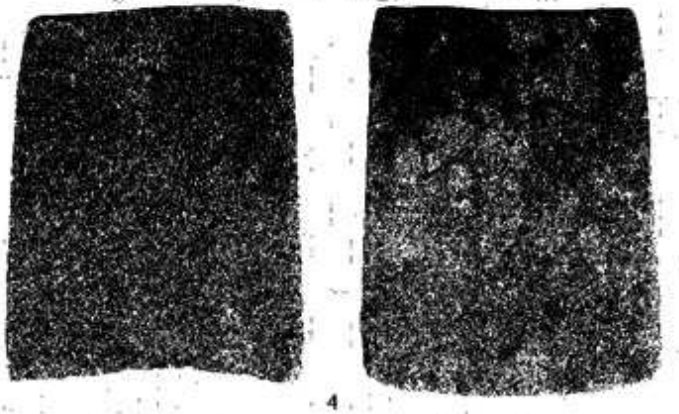
図版 4



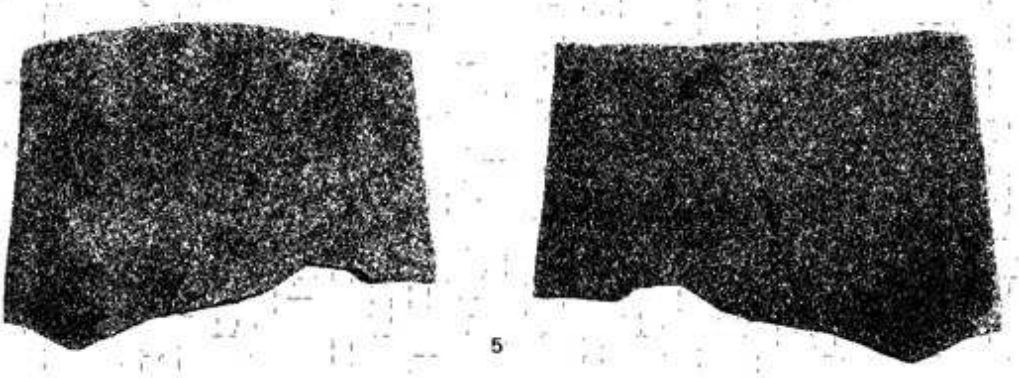
1

2

3

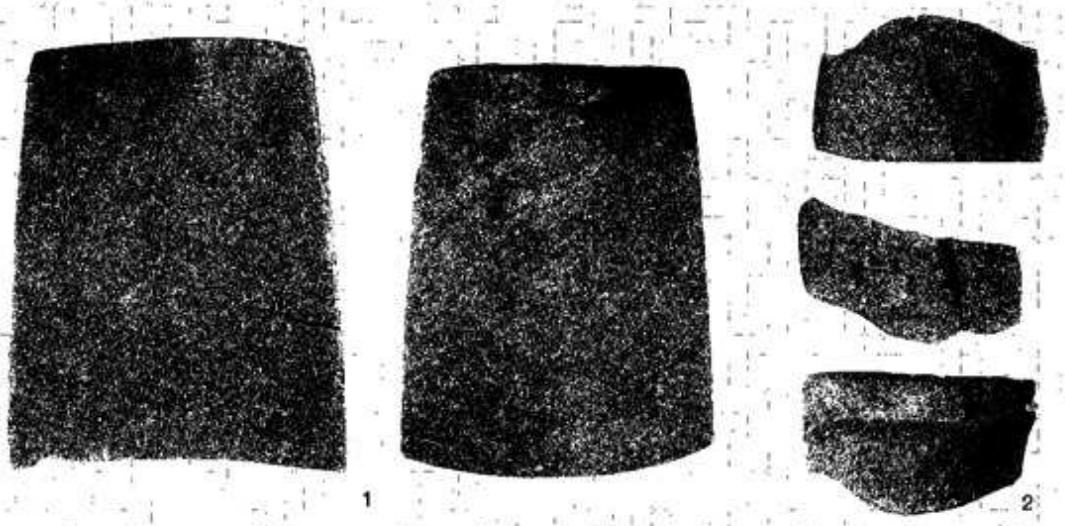


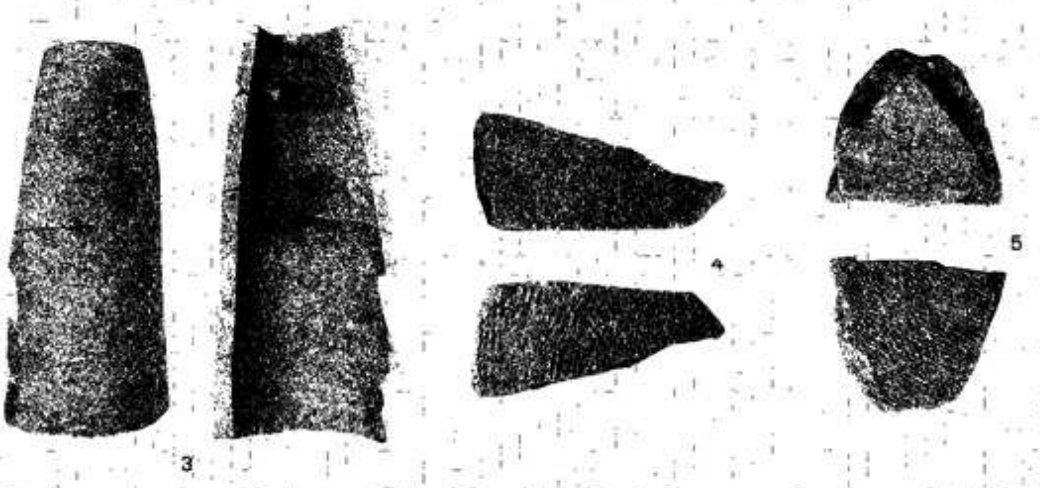
4



5

新開窯跡





新開窯跡(2)—1・栗谷ツ遺跡

研究紀要　第7号

1990

平成2年3月25日　印　刷

平成2年3月31日　発　行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01　大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493—39—3955

印　刷　望月印刷株式会社